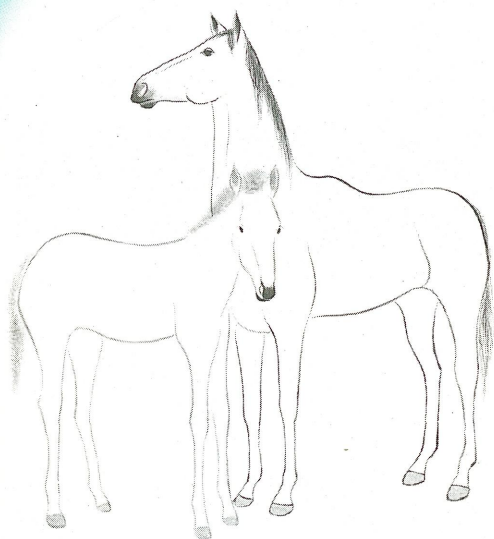
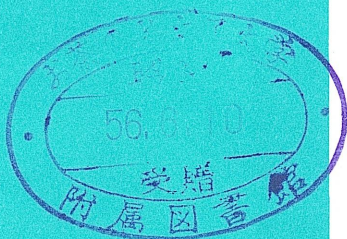


幼児の教玄月

第八十卷第七号

日本幼稚園協会

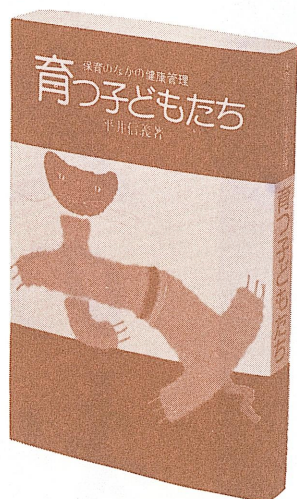
家庭・保育所・幼稚園



7

子どもたちの健康管理のために!!

好評発売中



保育のなかの健康管理

育つ子どもたち

平井信義・著

A5判・424頁・定価1,600円・〒300円

身体面だけではなく、「心」の問題も大きくからませた新しい健康管理の書。実際的な問題と基礎的な子どもの健康について、わかり易く解説されています。



好評発売中



新しい幼児体育

おはなし体操

石井文子・著

A4判・108頁・定価1,200円・〒300円

先生の楽しい話を聞きながら体を動かすと、いつの間にか子どもの体力づくりができる本。話と伴奏と動きのイラストが37曲、年齢別に配列されています。

フレーベル館



第八十卷 第七号

幼児の教育 目次

—第八十巻 七月号—

© 1981

日本幼稚園協会

えたいの知れぬ……………日名子太郎(4)

私の幼児教育論

—「むごい教育」の対極点にあるもの—……………伊藤隆二(6)

エリクソンと幼児教育(2)……………仁科弥生(13)

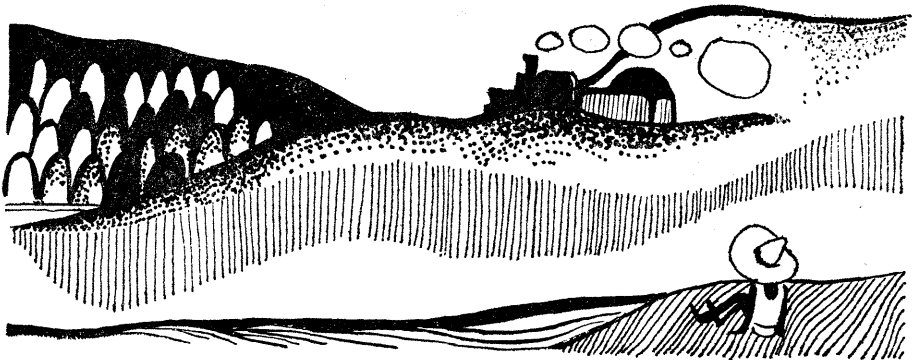
続・保育の中の小さなこと大切なこと⑧……………守永英子(22)

転任……………小坂田玲子(24)

東京からデンバーへ……………塚田幸子(26)

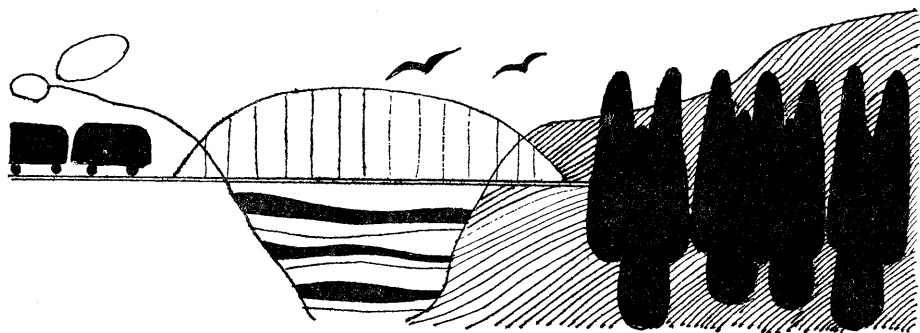
キリストの教えた「愛する」を

日本語におきかえたら?……………杉田稔(28)



煉瓦造りのお伽の城で……………	中島國太郎……………(32)
子どもの目……………	松木正子……………(34)
歴史人口学からみた生と死(七)……………	鬼頭 宏……………(38)
天神さまの太鼓橋……………	大宮真琴……………(44)
子どもとの出会いの中で学ぶこと③……………	水沼昭子……………(46)
書評……………	……………(48)
★インタビュー	
私の子供時代……………	内田光子……………(52)
『復刻・幼児の教育』並びに懸賞論文募集のお知らせ……………	……………(62)

表紙 紙・中村 宗弘
 表紙題字・比田井和子
 カット・福田 理恵



えたいの知れぬ

日名子 太郎

この世の中には、えたいの知れない人もいるし、えたいの知れない事もいろいろある。よくわかるとなんだつまらないという事でも、正体のわからぬ間は、つまりえたいの知れない間は、不気味で、こわいものである。また逆に、本性がわかると、もつとこわくなる場合もあり、世の中、仲々に複雑である。

先日、ある出版関係の一青年と話をしていた、話題が最近の子どもの人口激減のことになった。

「君のところ、もう子どももいるの？」

「いえ、まだなんです」

「いつ結婚したんだっけ？」

「えー、もう七、八年になりますか」

「それじゃあ、そろそろ一人ぐらいいは……」

といったやりとりがあつて、要するに彼の考えをつきつめていくと、将来の社会には、あまりいいことも無さそうだし、子どもを生んでも、その子がかわいそうということのようである。この青年のような、こんな先行きへの不安を抱いて生きているものは少なくないし、そこまではコンピュータもわからなかつたらしい。

現代の社会は、何でも科学的予想が可能のように錯覚をおこし、科学的に明らかにしていこうとする傾向の強い反面で、たたりとか、古い・迷信めいたことがそれ以上に流行している。戦後「ひのえうま」の年の出生児数が最低といつた出来事のある文化国家は珍らしい。もつとも、推計学などは、じき出した予想人口数通りに実際人口が増減すれば、ことは簡単だが、そううまくはいかないから、面白いのに、それが不安になるのが現代の日本人らしい。

子どもを生んで、みんな保育所や幼稚園に入れておけば、みんな幸福になるだろうと普通の人は考えるらしい、ところがそうでない人もいる。「幼稚園制は、軟弱な好事家や、みだりに分に安んずる平俗人やを産出するのに、もつとも効能のある手段の一つである*」といった具合である。

あるものを正しいとすることに對して、必らずその逆を正しいとするものが存在する。ユークリッド幾何学があれば非ユークリッド幾何学あり、発達中心の心理学に對して、反発達の発達心理学もある。自由保育あれば、強制保育もあるのがこの世の中である。

いまは、誰しも少なく生んで、うまく育てたいという。そうすれば、生活が楽で、皆、幸福になれると思ふらしい。ところが、その親たちは、將來、自分らが年老いて老人になった時、子どもを生まなかつたことで、青壮年層の人口が稀薄で、沢山な老人の福祉まで負担することは不可能で、老人は死ぬまで自分たちの為に老体にムチ打つても働らきつづけねばならないという第二のえたいの知れない不安を作り出していることに気がかない。

「有名無実」ということばがあるが、次から次へといろいろな本に名を連ね得意になって、これでわが一生涯泰とほくそ笑んでいる「有名無実人」は気の毒なものだ。世阿弥元清いわく「公案して思ふべし。我が位のほどをよくよく心得ぬれ

ば、それほどの花は一期失せず。位より上の上手と思へば、本ありつる位の花も失するなり。よくよく心得べし」(「風姿花伝」第一年来稽古条々) まあまあ人間、ほどほどに生きてこそ花咲くし、えたいの知れないものに不安を抱くようなこともおこらない。

今から十年ほど前に次のような駄文を書いた。(日名子太郎「保育の四季」の一節より)

「いつまでも 　いつまでも

詩人の消え去つたのちも

歌は街を流れつゞける

人は作者の名も知らない。^{**}

* * * シヤルル・トレネ作詞・曲

保育者は、この詩人のようなもの。子どもたちは育つてやがておとなになり、保育者の名前などは忘れて了います。それでも歌は街を流れ生きつゞけます。私たち保育者は、いつまでも流れるような魅力あふれる歌を綴らねばなりません」と。

「無名有実」に生きてこそ、えたいの知れないものは雲散霧消するものである。(玉川大学)

私の幼児教育論

——「むごい教育」の対極点にあるもの——

伊藤隆二

甘えを助長する教育

徳川家康が幼少の頃、今川義元のところにあずけられたことがあった。一種の人質であった。そのとき、義元は家臣に「竹千代（家康の幼名）にむごい教育をしろ」と命じたという。義元のいう「むごい教育」とは、いったい何だったのか。

家臣はさつそく、その日から竹千代を好き放題にしたのである。欲しいといえ、すぐお菓子を与える。あれが着たいといえ、すぐ美衣をまとわせる。武道に必要な稽古はいつさいおこな

われなかった。これで竹千代は将来、武将となるための基本である体力と武術と教養のいっさいが骨ぬきにされることになる（はずだった）。義元のいう「むごい教育」とは、生きていながら死んだ（ような）竹千代を育てあげることだったのである（しかし、結果的には、桶狭間での義元の敗死によって、竹千代は解放され、全く別の道を歩んだのである）。

義元のいう「むごい教育」は、形はかわっていても、現代の乳幼児にたいしてもおこなわれているのではなからうか。それは子どもの甘えを助長する教育である。

ヨチヨチ歩きをはじめた子どもを、一つの例としてみてみよ

う。子どもははじめから、歩き方が上手なわけではない。ころんでは立ちあがり、またころんでは立ちあがることで、少しずつころばずに歩けるようになっていく。子どもは歩き方が下手なくせに、凸凹の道や坂道を歩きたがる。そういう道では、バランスがとりにくいので、よくころぶ。そばに親がいなければ、子どもは自力で立ちあがる。そしてまた果敢に歩きだす……。こういう過程で、子どもは自力を確認し、ころばないための技術を身につけ、またむずかしい課題にもすすんで取りくむ強い子どもになっていく。

私はいつか、自宅の近所を散歩しているときに、ころんだ子どもが立ちあがったあと、うしろをふりむいたのを見たことがある。おそらくその子どもは自分がころんだ理由を、たしかめたかったにちがいない。それは小さな考える力の芽生えであったのである。

ヨチヨチ歩きをはじめた子どもはころぶ——立ちあがる——ころぶ——立ちあがる……という体験をとおして、みずから体力を、技能を、勇気を、そして知力を育てているのである。そのために子どもは好んで悪い道や坂になっている道を歩くのである。失敗するために、そうやって歩くのである。

しかし、近頃の若い母親には、完全欲が強いためだろうか、あ

るいは仔猫を可愛いがる程度の愛情しかないためだろうか、子どもに四六時中、かかわっていないではおれない人が多いようだ。子どもがヨチヨチ歩きをはじめると、ころんだら大変だ、怪我をしたら可哀想だ、と思うのだろう、そばにつきっきりである。子どもがよろけると、母親はさつと手を出す。道の悪いところに行かないように、子どもの行動に制約をくわえる。「そっちへ行つてはダメ」「そんなところへ行つたら、ころぶでしょ」と禁止のことばが多くなる。

子どもが母親の目をぬすんで、道の悪いところにかけて行って、ころぶようなことがあると、母親は動転する。飛んで行って、抱きおこし、二度とこんなことをしてはいけません、と泣き声をたてる。

子どもがひとりで歩いているうちに、またころぶ。母親はまた飛んで行って、抱きあげる。そうしているうちに、またころんでしまった子どもは、母親が抱きあげてくれるまで、泣きつづけるだけで、自分から立ちあがろうという気持はおこらない。子どもは、自分の助長である。自分からすることを体験しなかった子どもは、自分ですることの喜びを知らない。体力も技能も勇気も、そして知力も育たない。四、五歳になると、おとなへの依頼心の強い、やる気のない、意気地なしになっていく。そして小学校にあ

がる頃には、体力の乏しい、運動神経のぶい、自分で考えることを知らない子どもになっていることだろう。

母親は「むごい教育」をやったことになる。

鋳型にはめる教育

ころんでワーワー泣いている子どもを助けたいのはむごいことではないか、と反論する人もいる。子どもは助けて欲しいと訴えているのであるから、そばにいますとおとなが即座に応答してやることで、子どもは満足感がえられ、情緒が安定する、子どもの欲求を無視したならば、不満が残り、情緒の障害がおこるのではないかと。

戦後、アメリカ合衆国から輸入された「適応」は、もっぱら子どもの欲求充足によってもたらされ、逆に「不適応」は欲求不満から生じるという図式で説明されていた。この図式をうのみにして、子どもには欲求不満をおこさせてはいけない、子どもをいつでも満足のいく状態にしておかねばならない、と説く識者もいる。しかし、それが義元流の「むごい教育」の典型なのである。

今、幼児にはもう一つちがった「むごい教育」がおこなわれている。私は「鋳型はめこみ教育」とよんでいるのであるが、それ

はかつて中国ではやっていた纏足に酷似している。纏足とは女性の足を大きくしないために、幼いうちから布をかたく巻きつけて、その発育をさまたげるといふ風習のことである。

「鋳型はめこみ教育」の鋳型とは、教師のつくるカリキュラムのことである。

園をあげて、一年間とか二年間のカリキュラムを作成し、保育している幼稚園がある。テレビの番組表や列車のダイヤのようになり、みごとにつくりあげられた、そのカリキュラムを座右において、すべて予定どおりにすすめられる保育によって、子どもたちも、これまた予定どおりに成長していった（ようにみえた）のであるが、気がついたら、カリキュラム（という鋳型）にみごとにはめこまれていたのである。

そのときの、そのカリキュラムの目的は「適応」であったことはいうまでもない。子どもたちは一様に、集団適応力を身につけたのであるが——つまり、指導者の命令に即座に反応し、軌道からはずれず、みな「いい子」（じつは「ませた子」）になったのであるが、子どもひとりひとりからは「じっくり考えぬく態度」も「奇想天外な発想」も、「自分のやり方で積極的に遊ぶこと」の欲「び」も「おっとりとした、おおらかな心情」も、また「孤独に耐える強さ」もすっぽりとぬけ落ちていたのである。

私はかつてアメリカ合衆国滞在中に、大変恥ずかしい思いをしたことがある。いくつかの学校や幼稚園にお邪魔したときに、日本への「おみやげ」というつもりで、校（園）長さんに、「この学校（幼稚園）のカリキュラムをいただけませんか」と、所望したことがある。しかし、どこでもそれは叶えられなかった。いくつかの幼稚園で、園長さんに同じようなお願いをしたところ、話好きなある園長さんから「あなたは冗談をいつているのでしょう」といわれたのである。私はその意味を解しかねていると、彼女はつづけた。「あなたがもしどこかの病院に行つて、院長さんにこの病院のカルテをくださいとたのまれたら、その院長さんがこれが私の病院のカルテです、といつてくださるでしょうか。この病院に入院（あるいは通院）しているAという患者、Bという患者のカルテならばありますと、答えるのではないでしようか。幼稚園（学校）も同じです。幼稚園（学校）のカリキュラムなどはありません。Aという子どもの、Bという子どものプログラム（個別処方箋 Individual Prescribed Program）なら、一応は用意していますか……」と。

私は日本の学校や幼稚園なら、大抵のところ、その学校の、また幼稚園のカリキュラムをみせてもらえるし、所望すればいいだけることが多いので、合衆国でもそうなのだろうと、早合点し

ていたことが恥ずかしかった。しかし、よく考えてみると、学校や幼稚園教育を受けている子どもひとりひとりの個性や適性や才能を無視し、全員に共通した一定の（固定的な）カリキュラムをつくることはほとんど全くといってよいほど、意味のないことなのだということがわかる。それにもかかわらず、学校や幼稚園単位だけではなく、ところによっては市単位で、あるいは県単位で、一定のカリキュラムをつくっているのはどうしたことか。

本来、カリキュラムは子どもの個性や適性や才能の伸展に役立つものとしてつくられたはずなのに、今では逆に、一定の（固定的な）カリキュラムにすべての子どもをあてはめることに終始している。しかも、子どもの成長の評価も、その一定の（固定的な）カリキュラムの到達度によって、ときには子ども同士の比較によっておこなわれている。

このような教育を私は「鋳型はめこみ教育」とよんでいる。それは「むごい教育」である。

将来の準備としての教育

「むごい教育」はそれだけにとどまらない。私どもは今の幼児の教育の多くは、幼児のために、おこなわれていないことを知らねばな

らない。それは子どもが小学校に入学したときに、また中学生になったときに、よい成績がとれるようにというねらいでおこなわれていることを指す。

小・中学校時代により成績をとることで、大学進学のための受験教育を熱心にやっている。「一流」の高校に入学することができ、やがて将来、高い地位と名誉と富と権力とを手にするのには有利な「一流」の大学に進学することができる、という暗黙の了解が教師にあるようだ。

幼児の教育も子どもがこうした「一流」の高校、「一流」の大学に進学するための準備としての意味があるのであって、幼児のために、おこなわれるのではない。

幼児の教育のさしあたりの目標は子どもが小学校に入学したときにより成績をとるにおかれる。手とりばやいのは幼児に小学校で習う読み書き算数を教えることである。また、幼児に英語を教えておくならば、子どもが中学生になったときに英語の成績がよくなるだろうと、考えている親もいる。

そうした教科の教育は幼児の、しかも早い時期におこなわれるほど、将来は有利になる。四、五歳からでは遅すぎる。二歳から、いや一歳前の赤ん坊のときからおこなわれるなら、それだけ将来は有利である……、こういう早期教育への関心と、その成果

への期待が高まるにつれて、幼児の教育はいよいよ幼児のための教育ではなくなっていく。

教師はもちろん（親も）目立つ能力（その多くは点数化される能力）にだけ関心を払うようになる。曰く、漢字をいくつおぼえたか、曰く、数唱は何桁までできるか、曰く、花の名前をいくついえるか……。また、他よりもはやく、ちゃんとできるということを期待する。教師は（もちろん親も）子どもにむかっていうことばで、もっとも多いのは「はやく、はやく！」と、「ちゃんとやりなさい、ちゃんとできたか」である。

折り紙を折るのも、絵を描くのも、意見をいうのも、はやく、ちゃんとできる子どもは褒められる。逆に、のろい子やいつまでも上手にやれない子は「ぐず」だとか、「へた」だと罵られることになる。教師の（親の）子どもを見る目は、次第に「はやく、たくさん、じょうずに」できるかを、監視する目になっていく。

子どもがはやく、たくさん、じょうずにやれないと、その監視の目はいつそう険しくなっていく。そして、非難のまじった（表面的には激励ののだが）強制がはじまる。「どうしてあなたはやくやれないの」「○○ちゃんをご覧なさい。あなたと同じ年でも、もうあんなにたくさんやっているじゃない」「あなたもがんばればやれるのに」「そんなにいうことをきかない子、先生はもう知

らないからね」など、など。

たえず、教師の（親の）監視の目にさらされている子どもは、次第に教師の（親の）顔色をうかがうようになる。そしてオドロシ、萎縮していく。「自分はみんなとの競争に勝てるだろうか」「自分はどうしても○○ちゃんには勝てっこない」「自分は何をやってダメだ」「お母ちゃんからこんな状態では、先がおもいやられるといわれたが、ボクの将来は灰色だ」「おとなになるのは怖い」……かくして子ども心に、将来への漠然とした不安と、そして焦燥感がうえつけられていく。

——このような「急がせ教育」や「非難教育」や「おどし教育」を私は「むごい教育」という。将来の（しあわせの）ために今をその準備にあて、しかも今をよく生きることを犠牲にしている教育だからである。

弱者を切り捨てる教育

くだいようであるが、「むごい教育」は「甘やかし助長」の教育、「鋳型はめこみ」の教育、「将来への準備」の教育にとどまらない。また、ある。「弱者切り捨て」の教育がそうである。

絵本の表紙からぬけ出てきたような可愛い顔をした子ども、父

母、祖父母、ときには、曾祖父母までさかのぼった血筋のいい子ども、お屋敷町の豪邸に住んでいる金持ちの子ども、政府高官、高級官僚、“一流大学”の教授、大会社の社長、大病院の院長、羽ぶりのいい弁護士・外交官といった、社会の“成功者”の子ども、あるいは知能テストで測定したIQがとびぬけて高い子ども——そういう子どもだけが集まる学校や幼稚園が、もしあるとするならば、そこでおこなわれる教育はどのようなものであろうか。

私の想像力はきわめて貧弱であるので、それをうまく描くことはできないが、おそらく次のようなものではなからうか。教師はことあるごとに、「あなたがたは、将来、社会の上流階級の人になるのですから、まず何よりも上品さを身につけなければなりません。ことばづかい、礼儀作法、社交術、そして豊かな教養を学ぶことが大切です。そのためには顔の醜い子、血筋のはっきりしない子、貧乏人の子、それに下層階級の子たちと交わることは許されません。心身に欠陥のある子も避けるべきです」と説教し、あの忌わしいカリキュラム——しかも一流の傑出人を目標としたヒエラルキー式のカリキュラム——を用意し、微に入り細を穿った「鋳型はめこみ教育」をおこなうのではなからうか。

顔の醜い子や貧乏人の子や障害のある子とは交わるな、という

のは「そういう子どもたちはあなたがたとちがう人種なので
す。一段低いところで生きる価値のない人種なのです。そういう子
どもたちと交わると、〈朱に交われれば赤くなる〉のと、えのよう
に、あなたがたもそのような価値のない人間になってしまうので
す。また、〈悪貨は良貨を駆逐する〉のたとえどおり、あなたが
た優秀な人たちも、次第におちぶれて、悪い人間になってしまう
のです。価値のない人間は価値のないままに、その分に応じて生
きればよいのであって、あなたがたはそのような子どもたち（お
となたち）とは無縁なのです」ということを、暗に教えているこ
とになるだろう。

立派な人間にするという教育は何も悪いものではないと、主張
する識者がいるならば、その人におたずねしたい。醜い子ども、
貧乏な子ども、障害のある子どもを排除した学校や幼稚園でおこ
なわれる「立派な人間をめざす」教育で、いったいどんな人間が
育つかを。弱い立場にある人に同じ人間として愛情を注ぐこと
も、困っている人に同じ人間として手をさしのべることも、悲し
んでいる人に同じ人間として慰みのことはをかけることも知らな
い人間とは、いったいどんな人間なのかを。

上流階級という高いところから下を見おろすことは得意でも、
弱い立場にある人、救いを求めて困っている人、悲しい思いにふ

けっている人に、同じ地盤で肩をよせあい、同じ人間として尽く
すことができないう人間とは、じつはこの世でもっとも悲しい存在
なのではなかるうか。

それにもかかわらず、弱い立場にある子どもに交わらせまいと
いう教育が、今、学校でも幼稚園でも、罷りとおっている。そう
いう教育を私は「むごい教育」といいたい。

さあ、のぞましい幼児教育とは何だろうか。それは「むごい教
育」の反対の極点に位置する教育のことである。

それを具体的に描き出し、そして実践するのは読者であるあな
たの務めだといえよう。

(神戸大学)



エリクソンと幼児教育 (2)



仁科 弥生

三、心理社会的発達段階

(一)口唇と感覚期

次にその発達段階の詳細をたどってみよう。

八つの発達段階の第一段階は最初の一年間にあたる。それは新生児が胎内での母親との共生生活を離れて、母親の乳房を与えられたときの最初の決定的な出会いで始まる。すなわち、新生児は、口から「取入れ」という生得的能力で、彼に食物を与えようとする母親の乳房に接近する。それは彼を迎える社会の意図とのはじめでの出会いでもある。その最初の行動の基本様式は「取入れ」である。乳児はまさにその口を通して生き、口を用いて愛する。しかし、口唇部位は「取入れ」様式のものであるに過ぎない。エリクソンは、この第一段階を、口唇―呼吸―感覚的段階とも呼んでいる。それは、第一の「取入れ」様式が皮膚の表面全体をも含めて、これら三つの部位の行動を支配しているからである。つまり、感覚器官や皮膚もはじめは受容的であり、やがて適切な刺激を欲するようになっていく。たとえば、口ははじめはあらゆるものが彼の口へ直接に運ばれてくることに依存している

が、やがて適切なものに進んで吸いつき、そこから出る液体を喜んで飲むようになる。

同様に、彼の視界に入ってくるものをその目で「取入れ」とし、またそれができるようになる。触覚も快感を与えるものを「取入れ」るようになる。しかし、これらを可能にするための乳児の身体の諸機能のすべてはきわめてもろいため、確実に彼を生存させ、彼の傷つきやすい呼吸や新陳代謝、血液循環などのリズムの協応を助けるためには、感覚への刺激が適当な強さでしかも適切な時期に与えられなければならない。そうでないと、彼の開かれた受入れの姿勢は、突如として防衛に変わることがある。したがって、この場合、乳児が生存していくための必要最小限度の供給が何であり、また耐えうる最大限のプラスチックが何であるかは、かなり明白である。ところが起こっても差支えないことに関しては相当な幅があるといえる。それらの中で何が実行可能であり、或は何が必要であるとみなすかということにあたって、それぞれの文化は大幅に特権を行使している点をエリクソンは指摘している。

たとえば、スー族では、かつて乳児は昼でも夜でも泣くたびに乳房が含ませられた。母親の乳房をおもちゃにして遊ぶことも許されていた。計画的な離乳のしつけなどまったくなく、授乳は三

年から五年間続いたという。そのスー族の生活では寛容であることが一つの徳目とされていた。狩猟を生業とする彼らは、獲物に出会った幸運な仲間の分配や狩人としての腕のたつ仲間たちの施しに依存して生きていた。したがって彼らにとって寛容性の徳目は不可欠だったのである。してみると、その文化的要請は、寛容性の徳目を養う最初の基礎を母親の無制限の授乳を享受する乳児の特権においていたことになる。このように、何が「子どもにとってためになる」ことであり、何が「起こっても差支えない」とであるかは、彼がどのような文化に属しているか、またその文化の中で将来どのような人間になることを期待されているかなどによって大きく変わってくるわけである。こうして乳児はその所属する文化の特定の育児様式との出会いを通して、その生得的な行動様式をその文化の社会的様式に適合するように変形させていくのである。

エリクソンは、一見、独断的にみえるさまざまな文化的条件づけの中に、ごのような集団固有の知恵というか、少なくとも無意識的な計画性といったもののあることを指摘し、同一性の確立のためにそれらが果たす役割を高く評価している。そこには、それぞれの文化の価値観の相対性を重視する彼のきわめて今日的な視点がはつきりうかがわれるのである。

さて、「取入れ」様式がこの段階の行動では優勢であるが、その他にいくつかの補助的な様式も乳児はもっている。たとえば、あごを歯ぐきで締めつけて、「かむ」という様式、吐き出すという「排出」の様式、口唇を閉じるといふ「保持」の様式、元氣のよい乳児にみられる頭と首全体を乳房の間に押しつける「侵入」の様式などである。これらの補助の様式の一つが、ある子どもにはとくに著しいとか、ある子どもにはそれがまったくみられないなど個人差もある。そして乳児の側の内的抑制が失われた場合、或は母親の側の必要なものを供給する機能が失われて乳児と母親との相互作用が乱された場合には、そのような補助的諸様式が殆ど支配的な状態にまで発達することがある。

乳児の内的抑制の欠如の一例として幽門けいれんがあげられている。それは食物を飲みこむとすぐにまた吐き出すという症状を呈するが、そこには支配的であるはずの「取入れ」様式とともに強い「排出」様式がみとめられるわけである。それが重症の場合や、適切でない取扱いをうけた場合には、子どもは自己と外界との関係の基本的認知に決定的な影響をうけるといわれる。すなわち、それは「保持」の様式を早期に、しかも過度に発達させ、子どもは口を閉ざしてしまふ。また食物が口内に入ってきてても内に留まらないことの経験から、それは入ってくるものすべてに對す

る子どもの不信に發展する。母親側の供給源が相互調節の機能を失った例としては、乳房をかまれることを恐れて、習慣的に乳首を引込める母親の行為をあげることができる。このような場合、乳児は、くつろいで乳を吸うことに専念するかわりに、早くからかむという反射運動を発達させることになる。実は、このような事態が、人間の相互関係障害のもっとも深刻な場合の原型であることは臨床的資料の示唆するところである。人が何かを得ようと欲する。するとその供給源が引込められる。その人は反射的にそれを放すまいとしてしがみつく。しかし放すまいとすればするほど、供給源は一層決然と離れていく。

子どもの意識、協応、反応などの範囲が拡がるにつれて、子どもは自分が属する文化特有の教育の諸様式に出会うことになる。その過程は、周囲からのさまざまな刺激に対して子どもが未熟な反応様式を調整することによって、その社会の中で生きていくために必要な社会的行動の一つ一つを個人的にも文化的にも意味のある方法で学んでいる過程である。たとえば、「得る」こと、すなわち与えられるものを受け取ること、人が人生で学ぶ最初の社会的行動である。これは簡単なことのようにも思えるが、実際にはそれほどやさしいことではない。まだ未熟で不安定な乳児の身体が、母親側の育児法に合わせて自分の諸器官を調節すること

を学んだときに、はじめてこの行動を学んだことになるからである。

したがって、乳児が「得る」ことを学ぶための最善の準備状態とは、乳児が母親との間に相互調節を行なうことができるということになる。つまり、母親がまず与える方法を発達させ、それに従って乳児が受け取る方法を発達させ、協応させる。そしてそれを母親が許す。このような相互調節が確立してはじめて乳児と母親は口と乳房という焦点的な器官を通してのみならず、身体全体で温情と相互性とをくつろいで示し合い、楽しむことができるようになるのである。エリクソンは、こうして発達する相互にくつろぎあう関係（彼はこれを信頼関係の表明と考えている）の獲得こそ乳児の他者との最初の出会いにおいてもっとも重要なことであると述べている。

さて、一年の後半になると、より積極的に、方向性をもって目標に接近する能力が発達し、乳児はまた、そうすることに喜びを経験するようになる。歯が生えてくると、硬いものをかむ喜びも発達する。これを形態的に拡大して考えてみると、この「かむ」という能動的な「取入れ」様式は、さまざまな他の活動をも特徴づけていることがわかる。目は、はじめは目の前に現われる印象を受け取るだけの受動的な器官であったが、今や焦点を合わせる

ことを学び、不明瞭な背景の中から事物を区別し、それらを「とらえて」その後を追うようになる。同様に、聴覚器官も自分にとって意味のある音を識別し、その音源をつきとめ、身体を適切な姿勢にかえる手引きをするようになる。手は目的をもって物をつかむことを学ぶ。このような発達とともに、いくつかの対人関係の型が確立される。物を取り、それを放さないという社会的行動がその中心である。乳児は自分の姿勢をかえ、寝返りを打ち、徐々に座ることを学ぶにつれて、自分の手に届く範囲内にあるすべてのものをつかみ、吟味し、自分のものにするメカニズムを身につけていく。つまり、この段階では、「かむ」「つかむ」という第二の「取入れ」様式が支配的となるのである。しかし、このような進行為阻止されると、たとえば乳児はくつろいで吸う代わりに、「かむ」様式へ早熟的に進行するとか、逆に指しゃぶりというような第一の「取入れ」様式に固着する傾向が現われる。

しかしながら、この段階で、環境がいかに望ましいものであつたとしても、衝撃を与えるような環境の変化から乳児を守ることができないこともエリクソンは指摘している。その理由は、歯が生えてくるからである。しかもそれが離乳の時期と時間的に接近して生えてくる。また、同じ頃、母親が職場へ復帰したり、或は次子を妊娠したりして、乳児は母親との分離を経験させられるこ

ともある。しかも、それまで快感を味わう主たる座であった口腔内に歯が生えてくると、それが引き起こす緊張や痛みは、一層強くかむことよってのみ軽減されるのである。それは、まさにマゾヒズム的ジレンマである。その上、それは社会的ジレンマをも招来する。なぜなら、今や乳児は「かまない」で乳房を吸うことを学ばなければ、母親が痛みと怒りから乳房を引込めてしまうからである。そのとき、乳児はかもうとする自分の歯に対する怒り、乳首を引込める母親に対する怒り、さらに自分の無力な怒りに対する怒りに圧倒されてしまう。このように母と子が互いに補足し合う行動による相互調節の型では対処しきれない激しい怒りを乳児は不可避的に経験し、しかも自己の無力さから敗北を喫することにるのである。

エリクソンは臨床的研究の症例をもって、個人が結ぶ自己との関係、および外界との関係におけるこの幼児初期の破局が自己内部の不幸な分裂の起源となりうることを説明している。そして、それだけに、乳幼児期における母親やそれに代わる養育者との結合は深く、また満足すべきものでなくてはならないと説いている。また、子どもがさらされる人間性の中にある免れがたい「悪魔」（たとえばかみたいという欲求）に対して、これ以上の悪化を避けるためには、おだやかに、安心感を与えながら、それと

経験させることが大切であり、離乳にしても、それが乳房の突然の喪失や、母親という安心感を与える存在の喪失を意味するものであってはならないと警告している。事実、この時期に慣れ親しんだ母親の愛情を突如として失い、しかも代理となる者がいないと、子どもは抑うつ状態に陥り、或はそれ以後の子どもの生涯を通して陰うつな潜在的性質として残る場合のあることは、他の文献にも示されている。

したがって、この段階で学習しなければならない発達課題は、子どもが母親を通してこの世界を信頼しうるようになることであるとエリクソンは主張する。乳児の外界に対する信頼の最初の表明は、授乳時に示すくつろぎ、睡眠の深さ、便通のよさなどの形で示されるという。やがてそれは、母親がそばにいらなくても、泣いたり、怒ったりしないで、母親の不在を受け入れることができるようになることなどで示される。それは、一つにはピアジェが明らかにしたように、知的発達にもなって対象の永続性の概念が獲得され、子どもに母親のイメージを保つことのできる能力が発達してきたからである。だがそればかりではない。母親の存在が子どもにとって内的な確実性をもつようになったからでもある。ここでエリクソンが信頼と呼んだものは、必要物を供給してくれる外的存在がいつも同じであることや、連続性を有している

ことを子どもが期待するようになったという意味と、子どもが自身を信頼し、さまざまな衝動に対処する自分の諸器官の能力を信頼するようになることをも含んでいる。このような経験の一貫性や連続性や斉一性が自我同一性の基本的感覚を準備するのである。

また、この段階の危機が望ましくない方向へ解決された場合、基本的信頼が根底的に損傷をうけ、不信が優勢になるとされている。一部の研究者は、信頼感とか自律性といった諸特性を、ある状態において一回限りのこととして獲得される「達成事項」とみなし、各段階のそのような肯定的特性だけを数えあげて、彼ら独自の達成尺度を作ろうとしている。そのような試みに対して、エリクソンは、各段階に存在する不信や疑惑など否定的な対応要素を無視してはならず、肯定的な特性と否定的な特性の割合が決定的要因となることを強調している。動物行動学者として有名なローレンツもその著書『文明化した人間の八つの大罪』の中で、愛や信頼がそれ自体善であり、不信がそれ自体悪であるという考え方は、われわれの社会では一般に善の不足と悪の過剰が支配しているということから発しているにすぎないのであって、それらは調和的に働いている一つのシステムの環であり、それ自体として不可欠の環であると述べている。エリクソンも不信の不可欠性に

ついて、基本的信頼が基本的不信を上回るバランスをもって永続的なパターンとして確立されることが必要であると説いており、子どもの自我は不信に打ちひしがれることなく、それを耐えることを経験することで、それを克服する強さをつけていくと考えている。

エリクソンによると、自我に課せられた最初の仕事は、生存を続けることに関連して起こる基本的信頼対不信という核心的な葛藤を解決するために永続性のある様式を確立することである。それは母親側の世話にとっても大切な課題となる。先に述べたように乳児は母親との相互関係の中で基本的信頼を学び、不信を経験する。その場合、乳児が最初期の経験から得る信頼の念の量は、与えられる食物や愛情の絶対量によるのではなく、母親との関係の質によって左右されるとエリクソンは強調している。すなわち、信頼感の確立にはまず、乳児と母親とが相互性の感情を築きあげるまでの過程が重要である。母親が乳児の欲求の表出を理解できるようになるにつれて、乳児もまた自分の欲求が満たされるであろうという期待を形成していくのであり、この相互性は、母親が乳児の欲求に対して適切に反応するときの一貫性を基礎にして築かれるのである。

発達の理論的方向づけを統合するものとしてエリクソン理論を

高く評価するニューマンらも、養育者との相互作用の重要性を力説している。たとえば、母親が子どもの欲求にどれほど敏感に応じているかによって子どもは自分の欲求が満たされ、自分が価値ある存在であるという確信を高めていくことができる。また母親以外の家族との相互作用の中で示される暖かさや喜びの経験を通しても信頼感は強められていく。しかし一方、そこには不信感を強める可能性もまた存在している。もし母親が子どもの欲求を理解することができず、これらの欲求に対して適切に反応することができなかつた場合や、欲求に応じてはいるものの、それが乱暴であつたりした場合には、外界に対する不安や疑惑が子どもの心の中に芽生えたと述べている。このように自分の欲求が満たされることに対する不確かさの感覚や、身体的、心理的慰めが得られないという感覚によって不信感が芽生えるのである。ことばをもたない乳児にとって信頼および不信はまさに体験にもとづいた現象なのである。

エリクソンによると、信頼感の確立にとって次に重要なことは、母親自身が養育者として信頼されているという自信と、自分がやっていることには意味があるのだという確信とをもつて子どもを育てることである。その意味で、伝統的なしつけの体系は、たとえその中の特定の項目が不合理であつたり、ことさらに残酷

にみえたとしても、それは全体としては子どもの中に信頼感を植えつける重要な役割を果たしうると考えられている。今日のように、価値観の変動のほげしい時代では、世代間の諸価値のあまりの違いに、ともすれば母親の自分に対する信頼は失われやすい。それだけに、まず母親自身が自己への信頼、育児に対する自信をもつことが、子どもの成長する力に対する信頼とあわせて必要であることをわれわれは再認識しなければならないと思う。

これまで述べたように、口唇―感覚の段階は、乳児に基本的信頼感と不信の源泉を形成するが、それと同時にこの時期に、基本的な生きる「希望」という精神構造の発達の基盤があるという構想をエリクソンはつけ加えている。すなわち、終始一貫した存在として面倒をみてくれる母親は乳児にとってははじめての対象の確証であり、それゆえに「希望」の基盤となるのである。そして「希望」は、この発達の第一段階で得るべき徳目であると概念化されている。徳目とは、基本的にわれわれ人間がもっており、われわれを生かし、その活動を意味づけ、生き生きとさせる内的な力であると定義されている。そして「希望」とは、求めれば必ず得られるという期待、或は願望は達成できるという確信をもちつづける傾向のことである。希望は、一旦叶えられて確かな経験となると、具体的な成功や不成功による希望や失望から独立して存

在するようになる。なぜなら希望が実現するという成功経験を
得ると、それはさらに新しい希望を生み出し、次にたとえ失敗して
も失望することなく、次のよりよい結果を旨ざして努力するよう
われわれを促す力となるからである。したがって、希望は周囲の
事態が変化しても、一貫して維持されるものである。人間は、状
況や条件の変化の中で、生涯にわたって信頼と不信との闘争を
重ねていく。それだけに、希望は一層不可欠なのである。エリク
ソンは、たとえ信頼が損われたとしても、希望だけは存在させな
ければならないと説いている。乳児院の子どもの身体的、精神的
発達の違いや高い死亡率は、乳児期における養育者との親密な関
係の欠如が主な原因であるとしたスピッツの研究を、エリクソン
は、子どもが環境に対する確信や信頼の感情がもてず、生きる望
みを失った例としてあげている。

ところで、自我形成の基盤になるという意味において、乳児が
生後一年間の経験を通して基本的信頼感を獲得することの重要性
をエリクソンは強調しているが、このことは、われわれにマター
ナル・デブリベーションに関する研究を思い起こさせる。シャフ
ァーとエマーソンの特定の人との間に形成される親密な感情的結
びつき(アタッチメント)の発達についての研究によれば、生後
はば七ヶ月ごろに特定の人に対するアタッチメントが生ずると報

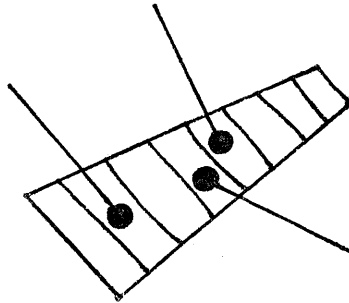
告されている。勿論、それ以前に、特定の愛着が形成される礎石
となる一貫性、暖かさ、親密さなどの経験が重ねられて、子ども
は特定の人物にたいして、徐々に好意を形成していくのである。
アタッチメントの最初の対象は殆どが母親であったが、中には父
親や祖父母が対象であったり、母親とそれらの人々が同時に対象
になるケースもあったと報告されている。シャファーらは、アタ
ッチメント形成を規定する要因として、一、子どもが母親と一緒
に過ごす時間、二、母親以外の人との接触程度、三、子どもの泣
き声に対する母親の反応性、四、子どもと母親との相互交渉の程
度などを有効な要因と考えている。

マターナル・デブリベーションは後年のパーソナリティの発達
にさまざまな影響を与えると考えられているが、ラターは、乳幼
児期に人との結びつきの形成に失敗することが後年の情愛欠如の
性格の発達ととくに関連することを指摘し、アタッチメントの形
成以後の家族との分離体験よりも、むしろ乳幼児期のアタッチメ
ントの形成そのものの失敗をその原因として重要視している。そ
して母親以外の多くの人物とのアタッチメントを促進する配慮が
実際的かつ有効であると提言している。すなわち、この最初の社
会的愛情が母親との間に確立されないと後の信頼や親密性の経験
などが成立しにくいとみるのである。一方、この関係が形成され

ると、それを土台にして、次々と他の人との関係を結ぶことが可能になるのである。したがって、この初期の愛着は、愛することのできる能力、他者に自分の愛を伝えることのできる能力のリリースにとって、きわめて重要な経験であるといわなければならない。これらの研究成果との関連においても、パーソナリティ発達論の第一段階の課題を基本的信頼感の獲得であるとするエリクソンの理論の意義はますます大きいといえよう。

こうして子どもの自我は、情緒的成熟や認知的成熟に支えられながら、まず自分の身体を統御することを学び、それら諸器官で社会的環境を知覚し、信頼をもって周囲の人々と交わっていくことを学んでいく。そして、この最初期の母子の信頼関係に勇氣づけられて、子どもは次の段階のむつかしい発達課題を達成しようとする努力を積極的に行なうようになる。したがって、母子の間で信頼が確立されることは、子どもの知的発達や社会的発達にとっても大きな意味をもつことになるのである。

(津田塾大学)



続・保育の中の小さなこと大切なこと⑧

守 永 英 子

卒業まで、日かずを教えるほどに迫ってくると、保育者として、それまでにしておかなければならない事どもに、心を捉われる。それは、子どもたちが、それぞれに、それなりに落ちついた状態になってくるからでもある。

そんなある日、私は、思いがけず、Tの母親から、相談の申し込みを受けた。"最近、Tの様子が、少しおかしいものですか"と言う。あと一息で、無事卒業の運びと、少し安堵していた私は足もとをすくわれた思いで、とまどいながら、早速、話を聞くことにした。

母親の話では、最近、Tが"誰も、私と遊んでくれない"と訴えたとのことであった。しかし、母親が見たところでは、近所のお友だちが遊びにみえても、自分ひとりで本を読んだりして、Tの方が、遊ぼうとしない。又、以前から幼稚園が好きな子どもで、今までは、決して休もうとしなかった。今年度は、一日も休んでいないと、自慢にしていたが、最近では、どちらでもいいというような態度をする、というこ

とである。

Tは、おとなびた女の子で、口も達者である。入園当初から、よく、女児のグループの遊びのリーダーシップをとっていた。他の子どもたちを、自分の思い通りに動かそうとするところが強く、その周囲の子どもたちも、"Tに、いじめられた"と訴えにくることが多かったが、この頃は、トラブルもずっと減り、Tも穏やかになったと思っていた。Tは、いつも、デンジマンごっこや、バレーボールなどのグループの中において、積極的に動いていることが多く、遊びに入れないで、ぼつんとひとりでいる姿を、私は、目にしたことがなかった。で、母親のいうTの変化は、卒業期の忙しさにかまけ始めた、ごく最近のことに違いない。母親の話から察すると、Tの対人関係は、ここで、又、一つの変化をみせているようである。

一体、どういうことなのか。卒業までの、あと僅かな間に、何をすればよいのか、何ができるのか。

心を駆けめぐらせながら、一見、マイナスの状況に見える
Tの変化が、長い目でみて、必ずしもマイナスではないのでは
ないかと思えた。Tにとって、一時的に行きづまりの状態
となっても、今までのTの友だち関係、つまり、支配し服従
の関係は、変化していくことが、望ましいのではないか。
翌月、登園してきた子どもたちが、それぞれの遊びに散っ
ていった頃、私は、Tの姿を探した。遊び室で、バレーボー
ルをしているグループを、じっと見ているTの姿を見つけた
時、子どもの心の変化に気づかなかった自分の至らなさに、
心の痛みを覚えた。

Tに、「どうしたの？」と声をかけるべきだろうか。それ
とも、バレーのグループに、「Tちゃんを入れてあげて」と、
言葉を添えてあげるべきだろうか。どれにも確信が持てない
まま、ちゅうちょしている私に、Tの方から声をかけた。「先
生、わたしに、何かご用だった？」Tの語調には、自分の中
に踏み込ませない冷静さがあった。

彼女の中に立ち入らないで、彼女のためにしてあげられる
こと……を求めて、私の心は駆けめぐった。いっしょにいて
あげること、それも、自然な形で……。

私はあわてて、云うべき言葉を探した。

「絵の具を溶くのを、お手伝いしてほしいと思って。」と言
う私に、Tは、素直に答えた。「いいわ、お手伝いしてあげ

る。」

紙粘土で作ったおひなさまの仕上げのために、絵の具の用
意が必要であった。二人で、保育室に戻って絵の具を溶きは
じめると、MやYが、「手伝わせて」と加わった。Tも、「じ
ゃあ、これやってもいいわ」と、すぐに仕事をゆずり、「わ
たしが前からやってたのだから、これはわたしよ」と、別の
絵の具を溶くことを主張した。しかし、以前のTと違って、
ずっと穏やかで、遠慮がちな語調だった。私は、ここに、T
の変化を感じた。

絵の具の用意ができはじめると、おひなさまを仕上げよう
という気持も起きてきて、Tを含む四、五人の女の子たち
が、和やかな雰囲気でおひなさまに色をつけはじめた。

翌朝、Tの母親から、「昨日は、お友だちに入れてもらえた
そうです」と報告があった。

更に、数日後、「この頃は、素直になって、私との関係も
うまくいっています」とのことであった。Tの母親は、「私
は、この子と合わないんです」と、言っていたのである。

問題は、周囲の子どもの態度ではなく、Tの側の、心のわ
だかまりだったように思う。私に出来ることは、「ありのま
まのT」と共に在ることだけであった。充分ではないにしても、
卒業までに、一応の解決をみて、ほっとしたのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

転任



小坂田 玲子

私のかねてからの念願であった「子供が自分の遊びを追求していく保育」がようやく園をあげて実現し始め、これからという時に転勤となった。新しい環境では「一斉保育」がその大半を占めていた。そして何よりも強く私の心を痛めたのは、そこにいた子供たちであった。顔色は蒼白で笑いがない。何かしら心が荒んでいるように思えてならなかった。進級して保育室が隣りに移ったことによる一時的なこと、簡単に言ってしまうえない、もっと別の何かがあるように私には感じられた。その一因が「一斉保育」にあるのではないかとも思え、私はこの辺のことを担任とじっくり話し合いたいと思った。

しかし現実にはうまく話し合えなかった。新しい環境の中

で自分の思う方向に早くしていきたいという「焦り」があったように思う。担任との間には溝ができ、私はあれやこれやと苦しみ、動けなくなってしまう。そんな時、「どんな保育でも、その保育で何をしようとしているのかをみ、それを認めてゆくことからまずは出発しなければいけない」という話を聞き、私は自分では既に十分知っているつもりだったが、知らず知らずのうちに大きな落とし穴に落ち込んでいた自分に気づいた。

いきなり流れを変えようとしたり、流れに逆らっても決してうまくいかない。まずはその人々のやり方を認め、あるいはその園や周囲に漂う風土を認めることから出発すべきだ。そして私は私なりの見方、考え方で子供と交わり、その私の実践を通して担任と話し合うことから始めてみようと思ったのである。

そんなある時、男児数名がMを苛めているのを見た。通りすがりにぶつていく子もいる。「臭い！ Mは臭い！」と吹聴したり、女児の中にも足げりしている子がいる。Mはというと、やられるままにじっと耐えていた。それ以来こういう場面に幾度か出会った。Mは自閉的傾向があるということなので、区の教育相談を受けていたが途中で止めてそのままに

っていた。Mは泣くことも、笑うことも、怒ることもできない、子供らしい本性の失われてしまったような生命力の微弱的な子供のようであった。私はMとできる限り交わり一緒に遊んだ。Mはいつの間にか私に話しかけてくるようになった。

ある日、MがSに苛められていた。Sは容赦なく蹴飛ばしておもしろがっていた。他の子もつられて「エイ！」とかけ声をかけて蹴飛ばしていた。Mは止めてほしいと言わぬばかりに手で顔を覆うようにして避けようと腕^{かか}んでいる。しかし何も言わない。私は「M君が痛いと言っているよ、嫌だから止めてほしいと言ってるよ」と声をかけた。と急にMがワッと泣き出した。周りの子供が吃驚する。「オイオイMが泣いたぞ！ 始めて泣いたぞ！」と囁きたてる。

Mはオルガンと壁の小さな空間に踞り「スッキリした。ああスッキリした」と言って泣き続ける。長い間抑圧されていたものが堰を切って流れ出した感じであった。するとまた他の子等が「ああスッキリしただって」と笑う。と急にまるで人が変わったように笑った子等に怒り向っていった。周りの子等が驚いて立ち竦んだ。

その翌々日Mは始めて笑った。声を出して可愛い顔をして笑った。Mの感情はこうして甦ってきた。ある時Mは、「む

ちゃくちゃ」が好きと言った私に「何故か？」と聞いてきた。私は「むちゃくちゃの後にはむちゃくちゃでないものが生れるから」と応えた。それからMは黙々とむちゃくちゃをやり、遊び始めた。こうしてMはM自身の足でしっかりと歩き始めたのである。そして私はあるMの黒ずんだ皮膚からは想像もつかぬような美しい紅の唇をみた。友だちとも対等に遊ぶ姿がみえるようになってきた。

担任はこのようなMをみて、この頃Mが変わってきた、母親も変わってきた、ニコニコと挨拶するし、何か言ってもすんなりと受け入れてくれる、Mの弟まで変わった、Mの家、家の中で変ったみたい、どうして急に変わったのだろう、と不思議そうに話しかけてきた。担任のMに接する態度も以前とはすっかり変った。と同時に私の話も受け入れてもらえるようになってきた。保育後、子供たちのことを話し合っていくなかにも次第に和やかな雰囲気が漂うようになってきた。そして今では「一斉保育」よりも「子供が自分の遊びを追求していく保育」が大半をしめるようになってきた。新しい環境に移った私も、ようやく一年を終えた。

(東京・駕籠町幼稚園)

東京からデンバーへ

塚田 幸子

東京の下町から米國コロラド州デンバーに移つて四か月、ようやくこの間の事を振り返つてみるゆとりの出てきたこの頃です。我が家は四人家族、夫と小学二年の長女、美雪、三歳の次女、直美、そして私です。

長女は当地に着いて二週間ほどで、パブリックスクールの二年生に入り、スクールバスで通っています。幼稚園から三年生までの小学校で、黒人街にあるため、生徒の六割から七割が黒人です。そのことを心配して私立を捜した方がよいと忠告して下さる方もありましたが、とにかくこの目で見てからとの思いで出かけてみることにしました。校長先生にお会いしてお話を伺う内に安心し、必要書類を提出し、手続きをすませると、校長先生は長女の手を引いて教室やトイレを案

内し言葉の先生や担任の先生を紹介して下さいました。

翌日から来なさいとのこと、果たして大丈夫なものかという両親の心配と、彼女自身の言葉がわからないのにどうしたらいいのだろうという不安とで、バスを待つ間、両親も彼女も極度に緊張した不安な表情でいたように思います。名前と教室番号、バスの番号等書いた大きなカードを首からさげて、やって来たバスに同じ住宅から五、六人が一緒に乗って行きました。聞いていた時刻にバス停まで迎えに行つて、長女が元気に降りてくるとホッと私は尋ねました。「どうだった?」「とっても楽しかった」という答えが返ってきてびっくり、詳しく尋ねるところでした。

バスから降りると校長先生が長女を迎えに出て下さつていて、校庭や教室へ案内して下さつたとのこと、教室を移動する時や、トイレ、食堂へは両方から二人の級友が手を引いて連れ歩いてくれたということ、休み時間にも色々な遊びに次々と誘つてくれて自分からは何もしなくても心配する暇もなく楽しく過ごせたとのこと、ひと言もしゃべらないのに級友の方から名前を覚えてくれて友だちになつてくれたとのこと、私は感心することしきりでした。とにかく「楽しい」「休みたくない」と今も言い続け、元気に通っています。少

し慣れた頃、うるさくしていて全員が先生に叱られ、長女だけほめられたという話を聞きましたが、彼女はその時ちよっぴり涙ぐんで言いました。「先生に叱られても、みんなと好きなだけおしゃべりできた方がいい」と、おぼろげに相手の話がわかるようになり、少しは読み書きもできるようになって、ほんの片言をしゃべり始めた長女です。得意の絵や工作、折り紙で、足りない言葉を補い、コミュニケーションする様はほほえましく、家に帰ってから行き来する友だちもできています。

三歳の次女の方は、真先に覚えた英語が「スクールバス」で、バス通学の長女をうらやましていますが、母と二人きり、取り残されたように感じて寂しいのでしょう。冬のデンバーでは外に出ても人の姿を全く見かけないことの方が多く友だちの沢山いた東京の生活を思い出し、泣きたいような気持ちになったのは私も同じでした。次女は日本にいた頃の友だちの名前をあげて「○○ちゃんはどこにいるの?」「××ちゃんはどこへ行っちゃったの?」と私に尋ねました。その前には「早くおうちに帰ろうよ」と言って、「ここがおうちなのよ」と言われ、悲しそうな、不思議そうな顔をしています。飛行機に乗ってアメリカへ行くことを喜んで、得意そ

うにふれまわっていた次女は、父親の出張の時のような短期的な旅を思い描いていたようです。

次女は、日本で言えばようやくこの四月に三年保育の幼稚園に入るところ、まだ早いように思っていました。友だちのいないことを思って、今は近くのデイ・ケア・センターやプレ・スクールと名の付く所を捜し歩いています。デイ・ケアは日本流に言えば保育所ですが、中身はいろいろで、たいていはプレ・スクールを含んでいます。プレ・スクールも週1回、2回、3回、毎日と自由に選べますし、午前中だけ、昼食まで、丸一日と時間もいろいろ選べます。プレ・スクールというのが日本の幼稚園に近いように思いますが、キンダーガルテンというのもある。こちらは、どちらかと言うと小学校のイメージに近いと考えた方がよいようです。こうして見て歩くこと自体が、今では春の訪れと共に楽しみとなり次女も私も救われたように感じています。



キリストの教えた「愛する」を 日本語におきかえたら

杉田 稔

「敵をも愛せよ」この言葉を聞いて、「それはムリな相談だ。自分に害を加えた敵が好きになれるはずがない」と思われた方も多いと思います。

カトリックの神父なので、私はこのような反応を、たびたび経験しました。

ところで、「そんなできっこないことを命じるキリストなんか好きになれない」などと結論するのは、ちょっと待って下さい。

キリストの言う「愛する」と日本語の「好きになる」とはイコールと限らないのです。

日本語には「愛する」を言いかえることのできるさまざまな言葉があります。

「いとおしむ」「思いやる」「あわれむ」「かわいがる」「こいしたう」などそうですし、「あの子は親に大切にされている」「あの子は親の愛をゆたかに受けている」と同じニュアンスで使うことができます。

四百年前のキリシタンは、今ならば「神の愛」とでも訳すところを、「デウスの御大切(ごたいせつ)」と言っていました。

イスラエル民族をエジプトでの奴隷生活から解放したヤハウェを、また世界中の人間のひとりひとりを無知と迷いと負い目の奴隷から解放するため御子イエスを世に送った天の父を、日本の八百万(やほよろづ)の神々と混同されたくないばかりに、わざわざラテン語のデウスをそのまま使い、仏教的な上から下へのあわれみのニュアンスを嫌って「慈悲」を避けて「たいせつ」を持って来たのだからと、言われています。

一つの単語の概念のひろがりと中味、またそのニュアンスは、文化圏ごとに、その負って来た歴史と共に違ってゆきます。

ドイツ語のリーベも、英語のラヴも訳せば同じ「愛」ですが、英語のアイ・ラヴ・ユーと、ドイツ語のイッヒ・リーベ

・ディッヒの使い方はかなり違うようです。

英語圏では何度繰り返してもいいこの表現は、ドイツ語では「誓い」のニュアンスが濃いため、ふつうなら一生に三度、つまり求婚、婚約、婚姻の際にだけ口にされるもので、他には戦時の召集や単身赴任のように、止むなくしばらく離れて暮さねばならぬ夫婦や婚約者の別れのことばとして用いられるのだそうです。

いまの日本ではどうでしょう。

昔なら「いろ」「こい」と表現されたエロスのものが、「愛」のイメージの中心に置かれているのではないのでしょうか？

もちろん今でも、兄弟愛、師弟愛、郷土愛、愛国心などの言葉は残っていて、その愛にはエロスの要素は含まれていないでしょうが、これらの愛について耳にすることは非常に少なくなったように思えるのです。

では、キリストの教えた「愛」はどうだったのでしょうか。「他人にして貰いたいと望むことを、そのままひとにしてあげなさい」(マタイ7章12節)

「愛してくれる人を愛したとて、何か特別なことをしたのだろうか、天の父は善人の上にも、悪人の上にも恵みの雨を降

らせ、日をのぼらせられる。隣人も敵も区別なく愛そうとするとき、あなた方は天の御父の子らしくなれるのだ」(マタイ5章43―48節参照)

「いと小さき者のひとりにしてやったことは神にしてさしあげたこと、しなかつたことは神にしてさしあげなかつたことだ」(マタイ25章31―46節参照)

これらを味わい返して思うのですが、キリストの言いたいことをひらたく言いかえるなら、「誰でも差別せずに『兄弟』として受け入れ、兄弟として振舞いなさい」となるのではないのでしょうか。

ところで幼な児の間には人種差別はありません。親の社会的地位にも、貧富の差にも、うわべの美しさにも、みにくさにも、幼児はこだわりません。「あんな子と遊んじゃダメ」と親が言うとき、溝ができてゆくのです。

だからこそ、「幼な児のようでなければ神の国には、はいれない」(ルカ18の17参照)とキリストが言ったのでしょうか。でも大人の私達が、自愛心を乗り越えて、「ひとごとではないと取り組む愛」、「ありのままを受け入れる愛」、「損する喜びを知る愛」を身につけ、まわりにひろめて行ってこそ、この地上に真の平和と、人間の喜びがやって来るのではない

でしょうか。

キリストが教えた

「ゆるす」ということば

イスラエルの首都エルサレムの新市街に、日本人が虐殺記念館と呼びならわしている建物があり、ナチスが迫害し、虐殺したユダヤ人六百万人の記録が展示されています。

人間の尊厳の最後のひとかけらまで無視され、汚され、抹殺されて行ったユダヤ人たちのむごたらしい、いたましい写真や遺品が、順路をたどる訪問者に、まるでこれでもか、これでもか、とつきつけられ、聖地巡礼の私達一行は、息苦しいどころか、終りごろには本当に、胸が悪くなってしまうました。

でも、最後のパネルで、私達はホッと息をつき、救われた思いがしたのです。

そこには、ヘブライ語と英語で、大きく書かれています。

“We will never forget, but will forgive!”

「決して忘れはすまいぞ、でも、我々はゆるすのだ」とでも訳せるでしょう。

ホテルへ帰る巡礼バスの中で、「ゆるす」をめぐる議論がはずみしました。

日本人は、こんな厳しい「ゆるそう」を知らない……日本人は「ゆるす」ためには「忘れる」しか方法ないと思いつているのではないだろうか……私達は「うらみを忘れて、いつの間にか、どうでもよくなる」のを、ただ受け身に待つのが常で、「ゆるす」ということを、積極的な意志の問題として、とらえてはいないのではないだろうか……などと。

キリストはユダヤ人の血筋で、ユダヤ人に、ユダヤ人の感じ方、考え方にそって、当時の人々のことばで語ったのでした。

だから、いまのユダヤ人のメンタリティーの「ゆるす」を理解しようとするには、キリストの真意が何を志していたかを理解するために重要だと思つたのです。

一九七五年の春のことでした。

ところで二千年前のキリストは、幾度ゆるすべきかと弟子

からたずねられた時、次のようなたとえ話をしました。

一万タラントの借金を、主人に免じてもらった(つまり借りて棒を引いて貰った)人が、百デナリ(一万タラントの六〇万分の一)の貸しを、ひとから取り立てようとした。それを聞いた主人は怒って「私はお前の借りを免じてやった。お前も、あの仲間をあわれむべきではなかったか」と言い、借金を全部返すまでと、牢役人に引き渡した。

お前たちが一人一人、心から兄弟をゆるさないなら、私の天の父も同じようになさるであろう(マタイ18章21—35節参照)。

ここに「ゆるす」「免ずる」となっているものの原語はギリシャ語の「アフィエミイ」なのですが、この「アフィエミイ」は、マタイ4の20やマルコ1の18では、漁師がキリストに召された時、網を捨てて、(別の訳では、そのままにして)キリストについて行った、の「捨てる」「そのままにする」の意味で使われているのです。

つまり、キリストが教えた「ゆるしなさい」は、日本人の傾きがちな心情的なものではなく、もっと具体的、且つ即物的な「貸しがまだ返されずに残ってはいようと、それでよいことにする」そのままにしておく」とか、「受けた損害な

り、恨みなりをそのままに、取り合わない事にする」「それを無視する」といった内容のように思えます。

そうだとしたなら、日本語の「恨みを水に流す」とか「そのことは初めから無かったことにする」あたりが最も近い表現になるのではないだろうか。

でも、「目には目を、歯には歯を!」という復しゅうを正義と考えていた当時のセム族のメンタリテイ(実は現代のアラブも多分そうなのでしようが)の中で、ゆるしを説いたキリストは、それだけで、社会を乱す革命児、危険分子と見なされたことでしょう。

しかし、私の理解した限り、キリストは「ゆるし」を叫び続けたいわけにはゆかなかったのです。何故なら、キリストは「神は父、敵も含めてすべての人は皆兄弟」という世界をこの地上に作ろうとし、前にも述べたような「敵をも愛せ」と教えたのです。

この種のゆるし、つまり敵が自分に加えた損害も、侮辱もそれが忘れ難かろうとも、取り合わない、無視すること、あってこそ、敵を再び「兄弟」として受け入れ直すことが可能となる。だから、キリストは、殺される危険に直面しても、ゆるしを説き続けたのでしよう。(カトリック司祭)

煉瓦造りのお伽の城で

—大塚移転当時の附属幼稚園—

中島國太郎

三月半ばのことであった。今年はまだ風が冷たく、木立ちの風情も寂しげなこの日、私はお茶の水女子大学を訪れた。

正門左手の附属小学校は帰国子女学級の増設で慌ただし、徽音堂に続く正面の広い道もまた、大学の下水道工事とやらでごった返していた。荘麗な徽音堂に向かって左に折れ、附属幼稚園の古風な煉瓦造りのたたずまいを目にしたとき、そこには昔日の落ち着いた女高師があり、私の思いは、にわかには五十年近い幼稚園時代に遡っていった。

昭和八年一月、私たちは前年通ったお茶の水のブラック園舎を去り、西洋のお伽の城のような新しいこの幼稚園に移り、通い始めた。本校と同じ八咫鏡をバックに「幼」の字を記した徽章を帽子につけ、お弁当を入れたバスケットを片手

に下げたエプロン姿の私たちは、徽音堂を右手にしたこの道の突き当たりにある昇降口から、幼稚園の中に吸い込まれていった。

昇降口で上履きに履きかえると、付き添い人は右手の控室に姿を消し、私たちは遊戯室に向かう廊下に足を踏み入れ、いったん右手の帽子掛け室でバスケットなどを置いてから、教室に入っていた。私は初め林の組、それから池の組となったが、どちらも遊戯室に近い奥の方であった。教室では、受け持ちの及川ふみ先生をはじめ何人かの若い先生方が、快く私たちを迎えて下さった。

天気の良い日などは、教室から下履きに履きかえてすぐに園庭に飛び出し、砂場やブランコ、スベリ台などで遊んだ。ブランコの隣にあったジャングルジムは当時としては珍しいもので、これに登っての鬼ごっこなど、本当に楽しかった。

先生の「お入り」の合図で教室に戻ると、そこでは別の遊びの世界が待っていて、思う存分、自分の好きなことに浸ることができた。

中でも記憶に鮮明なのは「観察絵本キンダーブック」である。大判のこの絵本には、私たちの好奇心や知識欲をそそる絵が沢山描かれていた。何冊も備えてあったキンダーブック

の、ページを繰るたびに味わった胸のときめきは、今でも忘れられない。

「ぬりゑ」も楽しかった。クレヨンや色鉛筆で一心に絵を塗りつぶしていくうちに、綺麗な絵が出来上がっていった。そのころのデパートの文房具売場には「及川ふみゑがく」と記された「ぬりゑ」があった。

私の記憶の中にある及川先生は、恰幅のいい先生で、たいいてい着物姿で、小さな椅子にどっしりと腰を下ろし、私たちと同じように、粘土や黍殻細工や、切り絵などをなさっていらっちゃった。口数は少なく、何か言われてもそれは重々しくゆっくりと話されたので、私たちの組のボスであった五郎君も、先生から「五郎ちゃん」とたしなめられるのがいちばん苦手だったようである。

そんな及川先生も、遊戯室では若い先生と一緒に、私たちの遊戯の仲間入りをして下さった。五月の節句を控えて、「キンタロウ」の「おゆうぎ」を習った。「マサカリカツイデ キンタロウ……」の、「おゆうぎ」の歌も仕草も、まだ記憶に新しい。

今再び附属幼稚園の教室に臨んで、その昔、バスケットの中のお弁当を頂いた椅子や机が、五十年近い現在でも使われ

ているのを見てびっくりした。教室の組の名前を表したステンドグラスが、当時の姿そのままに残っているのも懐しい。お茶の水の幼稚園の歴史はそのまま我が国の幼稚園の歴史につながると言われているが、そのことを目のあたりにした思いがする。

私が東京高師の生徒であったころ、実演童話のクラブ「大塚講話会」に所属していたので、「一度話を子供たちに」と及川先生に言われ、遊戯室で園児に「おはなし」をしたことがあった。その時園長室で、倉橋惣三先生にお会いすることができた。確か昭和二十三年ごろのことであった。

幼稚園で堀合先生にお目にかかっているうちに、こんなにいろいろなことを思い起こすことのできた私は、及川先生と御一緒に私たちを導いて下さった菊池フジノ先生にも、三月末にお目通りすることができた。お茶の水幼稚園時代に先生が工夫された誘導保育のことについて語られる菊池先生の瞳には、八十歳近い方とは思われないほどのキラキラとした輝きが見られた。

あの煉瓦造りのお伽の城での生活は、今すぐに再現できるほど楽しいことばかりだったのである。

(東京都立教育研究所)

子どもの目

——「大きくなる子」の学習から——

松木 正子

きょう ようちえんにいってみたら、いけのくみのいすは、ひくかった。

うみのくみのいすは、ちいちゃかった。

それががっこうにかえってきて、じぶんのいすにすわったら、じぶんのいすがちょうどよかった。(後略) W子

これは「大きくなる子」の学習の一つとして幼稚園訪問をした後の記録である。

幼稚園から小学校に入学したばかりの子どもたちにとって、何を・どのように学ばせるのかということとは本質的な問題であるはずなのに深く検討されてはいないようである。幼稚園は幼稚園として保育園は保育園として、独自に保育をし

ているし（現行ではやむを得ないことなのだが）、小学校は今まで何の疑問もなく七教科に分化した教科指導を行なってきた。

だが子どもにとって学習とは何であろうか。入学したばかりの子どもにとって暦年齢の差は大きく、また適応の早い子と遅い子の差も明らかである。子どもの成長・発達をふまえて、どの子にもより効果的に基礎・基本を身につけさせることはできないだろうか。

この問題意識をうけて、本校では昭和55年度から「低学年における合科的指導」のあり方を研究することになった。一年目は、子どもの実態を考慮して幼稚園との違和感を少なくしながら適応させることをねらった。そのために、時間割や既製の教科の枠にとられない総合的な大単元を作り、その中で種々の観点からテーマを追求していく形をとることにしたのである。

「大きくなる子」は、十月から十一月の半ばまでの期間を一区切りとする大きな単元である。七五三という社会的行事をフィナーレにし、それまでに教科や道徳などを有機的に結合させた学習である。この学習のねらいは次の四点に集約される。

。自己の成長について認識する。

。周囲の人々への感謝の気持ちを育てる。

。自分を見つめ、素直に反省する気持と向上心を持つ。

。社会的・文化的伝承行事に目を向け、関心を高める。

学習のねらいの中に「自己の成長を認識すること」を取り上げてはみたが、一年生の子どもは自分の成長をどのような形で認識するのであろうか。

一般に、空間関係・大小関係・時間関係・同一関係といった形式的な推理力は一年生ではまだ未発達で、七・八歳頃から課題に対して適切な具体的操作を与えていくことによつて高めるといわれている。そこで、学習計画をたてるときに、六年生の授業参観と附属幼稚園訪問を取り入れ、その都度自分のいる位置（生まれたときから十二歳までの数直線上の位置）を考えさせることにした。

まず六年の授業参観を行なった。机が、立っている子ども胸の高さであること、むずかしい漢字があること、不思議な実験（金属を液体に入れて溶解実験をしていた）をしたこと、どれも驚きの的であった。その中で次のような感想があったのは興味深い。

六年生は　むずかしいかんじのあるぶんを　ぼくたちがかくのとおなじはやさでかいていました。　　O男

難しい漢字ではなく、それを自分たちがひらがなを書くように使いこなしていることが驚きなのであった。教室に帰ってもしばらくは、自分たちも六年生になったらあのようなことができるのであるという期待と不安で興奮していた。

次の日は幼稚園の訪問であった。冒頭に記したW子は幼稚園のいすに坐ってみてその小さいことを、「ひくかった、ちいちゃかった」と強調している。学校のいすは「ちようどよかった」のである。しかし感想はそこにとどまっている。S夫は、いすに坐った感想を六年生の参観の時と比較している。

（前略）いすにすわってみたらひざかかえをしている
みたいになっちゃくてびっくりしました。

このまえ　六年生をみたときいすがたかくてびっくり
していたのに、ようちえんではいすがちいさかったです。

S夫

いすの大きさ（高さ）という具体物を通して自分の大きさを感している。

大きさ（高さ）や位置というのは相対的なものでもある。自分が大きくなったからいすが小さく感じられるという推量へ進む子もいる。

ようちえんにいってみたら、ようちえんのときはちょうどよかったです。

ぼくがおおきくなったとおもいます。だからうれしです。

A 夫

いすが縮むはずはない。だからいすが小さく感じられるのは、自分が大きくなったことだと推量しているのである。そして自分の成長を素直に喜んでいる。

自分の成長の意識は体の大きさのみにとどまらない。

（前略）ようちえんのこはようちえんらしくてかわい
いこでした。

わたしもかわいかったのかな。

K 子

ようちえんへ行ってきてぼくたちよりとしがしたのひ
たちをみてきました。

行ってみたらずいぶんさわがしくて、ぼくはびつくり
しました。（後略）

T 夫

ようちえんらしく、いい、わたしもかわいかったかな、と
いう言葉の奥には、現在のわたしは幼稚園の頃とは違ってい
るのだという意識がはっきりとうかがわれる。また半年前ま
で生活していた場が「さわがしくて、びつくりした」と感じ
るようになっていく。

幼稚園訪問の後、「大きくなる」とはどんなことか尋ねて
みた。すると背がのびる、足が大きくなるという答えの他
に、のうみそが大きくなると答えた子がいた。また計算や、
さか上がり、そうじ、泳ぎ、本を読むことなどのような「で
きるようになったこと」も含めるのだと考えられるようにな
ってきていた。つまり学習し、体験した結果「大きくなる」
ことが、いわゆる「成長」の意味に近づいたのである。

ところで、子どもたちの目は私たちに予想もつかないとこ
ろまで見える目であった。

ようちえんのときは ゆうぎしつがひろくおもったけど、一年になったらたいいくかんがゆうぎしつよりひろいからゆうぎしつがせまくおもえました。(後略) H夫

わたしがようちえんにいたときはきがつかなかつたのに、きようみたらきがつきました。

そのきがついたことは、おちゃの水のおにわにできのいり口のまどにステンドグラスでやまのくみだつたらそのうえにステンドグラスで山のえがうつっていました。

わたしがいたころは きがつきませんでした。(後略)

F子

H夫は、いすのように坐ってすぐ比較できるものにとどまらず空間の大小を意識し、「たいいくかんがゆうぎしつよりひろいからゆうぎしつがせまくみえました」と根拠を示して述べている。またF子は、ステンドグラスに描かれている山や海の絵がクラスの名と対応していることをこの日初めて気がついたのである。ステンドグラスは高い位置にあるため普段は目につきにくいものである。おとなでも見過しやういも

のである。F子も通園している頃は気がつかなかつたのであろうが改めて見に来て、絵とクラス名との共通性に気付いたのだ。

「大きくなる子」は、

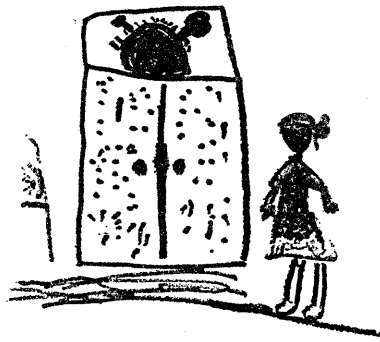
この後、わたしの歴史作り、等身大の自分、

新入生のためにチュー

リップの球根植え、七五三と学習が進められた。

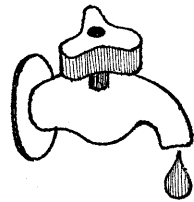
子どもは未分化だとよくいわれる。しかし思いがけない認識にまで到達する目を持っている。その目を学校教育の中で大切にはぐくんできていきたいものである。

(お茶の水女子大学附属小学校)



歴史人口学からみた生と死 七

鬼頭 宏



六、人口調節—墮胎・間引—

(一)

地域人口の規模を一定の水準に維持するメカニズムは、栓のない湯舟に一定量の水を保とうとする方法に似ている。

湯舟の底からはつねに水が抜けていくから、それを上まわる量の水が蛇口から流入しなければ水は増えない。こうして必要な量が得られたら、流出量にみあうように蛇口を細めればよいのである(ケース1)。

ところが、もし蛇口が故障してしまい、流入量を減らすことが

できなくなったとしたらどうだろうか。そのままにしておけば最後には水が湯舟のふちからあふれ出てしまう(ケース2)。このような、栓もなく蛇口も縮まらない状態で適正な水位を保つにはつぎの方法のいずれかを選ぶしかないのだろう。

そのひとつは、バケツで余分な水をかい出して他へ移してやることである(ケース3)。それもできなければ湯舟の底に別の排水口をもうけて流出量をふやすほかない(ケース4)。面倒ではあるが適正な水位を保てるという点では巧妙な方法といえる。

さて、第二回でお話したように、江戸時代後半の人口は停滞だったわけであるが、湯舟の場合のどれにあてはまるメカニズムが働いていたのだろうか。

まずケース3は無視できる。嚴重な鎖国体制がしかれていたの

だから、海外への移住はありえなかった。次にケース2はどうだろうか。これは生存水準ギリギリの生活水準まで人口が増加していった結果、大量死亡が起きて人口増加が停止するタイプで、アイルランド型と呼ばれるものである（一人あたり所得はこの場合、湯舟の体積と水量の比で示すことができる）。わが国の工業化がスタートする時点、ないし幕末の生活水準は、生存水準すれすれではなく、相当高かったと考えられるから、ケース2も除くことができる。

残る二つを検討しよう。ケース1は出生率の低下によって死亡率との均衡が実現する場合で、イングランド型と呼ばれる。意図的な出生制限には、婚姻の抑制（晩婚および生涯独身者の増加）による場合と、結婚後の産児制限による場合がある。ケース4は死亡率の上昇によって増加率が低下するような手段がとられる場合である。いずれの方法も、水位を上げない、すなわち生活水準を落とさないで済むことに変わりはない。

婚姻の抑制は有配偶率をおさえて出生を制限しようとするものである。これは西ヨーロッパの前近代社会においては一般的なかつ有効な役割を果たしていた。しかしわが国では、十七世紀から十八世紀にかけて、ほとんどの男女が結婚するような社会に転じてからは、その役割は縮少し、結婚後の出生制限へと中心が移った

ものと思われる（第四回、第五回）。

とは言え、江戸時代に行われた出生制限の方法は、ケース1に含まれる方法ではなかった。それは現代とくらべると荒々しい方法であって、しばしば、表面に現われることのない死亡の増加というかたちをとったからである。禁欲を除けばこれと言って有効な器具や薬品がなかったので、確実な避妊を望むことはきわめて困難だった。それにかわって嬰兒殺し（間引）や墮胎が確実な手段になっていたのである。

それは、時おり襲って来る飢饉や流行病とならんで、統計には拾いあげられない水面下で死亡率を高めたのであるから、江戸時代後半の出生制限は、おもに第四のメカニズムによって達成され、これを第一の方法が補ったと言える。

(二)

江戸後期の経済学者、佐藤信淵（のぶひろ）は『草木六部耕種法』という著書の中で次のように述べている。

「何れの国も貧乏百姓のみ極めて多くして、富饒なる村里あること鮮（すくな）し、百姓貧窮して食物衣服の給ざるが故に、婦人胚胎と雖も、其児を養育すべき儲蓄なくして、往々密にこれを墮胎すること多し。近來何の国も百姓人別漸々減少に及ぶ

ことは皆これが為なり」

このように墮胎あるいは間引が盛んに行なわれた結果、農村人口が減少していることを指摘する者は、ひとり信淵にとどまらず、数多い。しかし、それがどのような場合に、どの程度の頻度で行なわれていたかということになると、事柄の性質上、人口統計的に確かめることはとても困難である。

もっとも、そのような行為が人為的である以上、なんらかの痕跡が残っているはずで、それを見出すことは全く不可能というわけではない。

その点を確かめるために、墮胎・間引の動機ないし目的と、その手段・方法について調べてみよう。ここで利用したのは、だいぶ時代は下るけれど、全国的な産育習俗にかんする戦前の民俗学的調査をまとめた『日本産育習俗資料集成』中の、「墮胎・間引」の項である。

まず出生制限の動機について。圧倒的に多いのは子ども数が多いことと貧困であり、経済的意味が強かったと言える。当然、望ましい子ども数も当時の人々の頭の中にあつたことだろう。このほか、高齢出産であるとか不義・私生の子であるといった外聞を気にした理由や、多胎や不具を理由によって幼い命が絶たれるケースも散見された。

出生制限の方法は多様である。出産に至る過程から、避妊、墮胎（人工流産・人工死産）、間引（嬰兒殺し）に分けられるが、

避妊の方法として記録されているものの中にはまったく有効性を信頼できないものが多い。上の子の授乳期間を長びかせて、いつまでも乳をすわせるとか、灸をすえるとかは実効も期待できるだろうが、命名法（トメ、スミ、キリなどをつける）、神仏への祈願、妊娠を遠ざけるための象徴的行為（たとえば産湯をつかったタライの底を数多く叩くとその年数あるいは月数は妊娠しないとか、底のないヒシヤクか袋を神仏に供えるなど）は、まったく効果のない方法である。

避妊が不確実で、困難であるとすれば、墮胎・間引への依存が強くなるのは当然の帰結だろう。しかし墮胎は母体にとって、きわめて危険にみちた行為だった。都市では医師の調合する墮胎薬の利用もみられたが、一般には、何らかの薬効が期待できる植物（たとえばホウズキ、フキ、ゴボウ）の根や茎を子宮内に挿入して流産させるか、竹などの細くて堅い植物の枝茎、あるいは針によって胎児を刺殺することが多かった。リキとかコサンバアと呼ばれる専門家も存在したが、感染症による母体への影響は無視できない。この危険を避けるために、間引に頼ることの方が多かっただろうといわれている（阿知波一九六七）。

間引くことを返すとか戻すと表現するところが多い。当時の人々の感覚では、生まれたばかりの子は未だ「出生」したとはみなされず、生かすか戻すかが決定されたときに初めて社会的に出生したと認められたのである。多くは産声をあげる前に窒息させるか圧死させるかしたのである。避妊や墮胎とちがい、性別や身体状況を見届けたうえで選択的に実行できるという点で、当事者にとって都合がよかったといえる。

(三)

子どもの多いことは将来の労働力として期待できる反面、成育するまでの負担も大きくなる。したがって農業社会では、将来の労働力として男児の誕生が好ましいものとして迎えられ、間引は女児に対してより強く行なわれたと考えることができる。

また出生制限は一定数の子がすでに存在するような場合に始められ、保有農地の小さい階層ほど早い時期に、また頻繁に実行されたと想像される。

もし出生制限（とくに間引）に関してこのような行動仮説がたてられるならば、人口統計の上に次の徴候が現われるはずである。逆に、それが間引の慣行があったことの証明になるだろう。

第一に、女児が間引の対象になりやすいならば、宗門改帳に登

録される子の出生性比（女を一〇〇とする男子人口の指数）が異常に高いという歪みが生じるだろう（ヒトの出生性比は通常一〇五前後で、もともと男児出生数が多いけれど、乳幼児死亡率は江戸時代に男子の方が高かったので、宗門改帳の上では男女数は接近するはずである）。ただし、出生制限の方法として墮胎が主に採用されていたり、性別の選択が行なわれない場合にこの限りでないことはもちろんである。

次に子どもを望ましい数だけ生んだあとで出生制限が始められるならば、出生順位によって死亡率や出生間隔に差が生じている可能性がある。しかし宗門改帳からえられる幼児死亡率には、一般化できるほどの順位差をみつけることはできない。間引は出産直後に行なわれるのだから当然であろう。

また出生間隔が順位のおそい子ほど延びるという現象も普遍的とはいえない。早い時期から制限が実行されたり、望ましい数の子を得たあとは産み控えが徹底して行なわれるなど、出生間隔を变化させない方法がとられる場合もありえたからだろう。

最後に、母の年齢別出生率には何らかの不自然な歪みが生じる可能性があり、それは低所得層に現われやすいであろう。

出生率曲線は出生制限のない場合には二〇歳後半以後、凸型になり、制限がある場合には富士山のスロープのように凹型になる

といわれる。しかしどの年齢層でも同じ程度に制限が行なわれる場合には、その形状に何ら特徴は現われまいだろう。また出産率の階層間格差は出生制限の有無だけでなく、栄養・労働強度・医薬の利用などの面からもたらされるので、それをただちに出生制限に結びつけることはできない。

ここで、出生性比の不均衡を手がかりに間引の慣行があったことを推定した例として、武蔵国甲山村の場合を紹介しておきたい(鬼頭一九七八)。この村では所有石高の大きい農民階層と低い階層の間に完結家族の生涯出生数で一人以上の開きがあった(第五回)。そしてこの差は、結婚年齢や結婚の持続期間ではなく、妻の出産力そのものによってもたらされたものであった。

四五歳までの出産力は下層農の妻が、どの年齢層でも小さく、特に三〇歳以後の落ちこみが大きかった。下層農の夫婦のあいだで、妻が三〇歳をすぎてもたらす出生抑制が行なわれたことがこのことから想像できる。妻の最終出産年齢(上層三九歳、下層三六歳)もそれを示唆しているようである。

この点を出生性比によって検討した結果、間引による出生制限があったことが推測できたのである。すなわち、全出生児の性比は一一八だが、性比のアンバランスは下層農の第三子以後に集中している(一九三、他の組合せは八〇から一〇五)。そして特に

最終出生児の性比が異常に高い(下層農で二七九)ことが証明されるからである。

なおこのような出生性比のアンバランスがいつでも見られたわけではなく、特定の期間に集中していたことも見逃せない。甲山村では、出生率が著しく低水準だった一七九〇年代と一八五〇年代に集中しており(一九〇)、他の期間には正常な値(二〇七)を示していた。

(四)

江戸時代の人々は、なぜ危険に満ち、悲惨な方法で人口制限を行なっていたのだろうか。農村の窮乏、都市における道徳的頹廢の結果であるならば主張され、その非人道的な面が非難される。確かにその通りに違いない。しかし、立場を変えて経済学的な目で見ると、人口と資源の不均衡がもたらす破局を事前に避けて、一定の生活水準を維持していこうとする合理的行動と言えないだろうか。墮胎も間引も、これから生きていこうとする幼い命を犠牲にして、すでにある人々の権利を守ろうとする「予防的制限」ではあったが、生産の基盤も、技術・知識も異なる生態学的体系の中で理解しなければならぬだろう。

もちろん江戸時代においても、墮胎や間引が是認されていたわ

けではない。『子孫繁昌手引草』（『子育ての書3』）に他の著作とともに紹介されている）のように、間引の非人間性を論ずる目的で出版された数多くの印刷物が広く流布しているのである。

幕府各藩も、体制を維持する立場から人口制限に対して禁令を出すとともに、さまざまな対策を講じた。領内人口の減少は農業生産の基盤を掘りくずすことになるからである。

なかでもよく知られているのは、寛政から化政期にかけて職にあった三人の代官、岡田寒泉（常陸、寛政三博士の一人）、竹垣直温（房総常毛）、寺西封元（磐城）の治績だろう（社会事業研究所一九三六）。東北から関東にかけての地方は、天明期の人口減少も甚しかったが、墮胎・間引の常習地帯といわれていた。その防止を図って、これらの代官支配地では懐胎者の監視を厳重に行なうとともに、出生児に対して養育金を支給して出産を奨励したのである。すなわち妊娠した者は名主に届けて書上帳（これが前回紹介した懐妊書上帳である）に登録され、出産にさいしてはその状況と経過が村役人を経て代官へ届けられた。現行の母子手帳と出生届にあたる制度といえる。さらに児童手当にあたる援助を与えて、墮胎・間引の主因となっていた経済的困窮を救おうとしたのである。

ところで、戦後の日本が奇跡的な速さで達成した人口転換の背

後に、人工妊娠中絶の役割が大きかったことは周知の事実であり、現在でも公式統計で年間六〇万件以上が報告されている。年々（昭和三〇年以後）減ってきているとはいえ、少くない数である。

親子心中にも見られるように、子どもの命は親によって握られていると考える風潮は、江戸時代以来のもののだろうか。しかし江戸時代と異なって、教育も技術も高く、避妊のためのさまざまな手段が容易に手に入れられるこの国において、何か大きな忘れものがあるように思えてならない。（上智大学）

〔参考文献〕

阿知波五郎 一九六七 「日本産児制限史について」 医学史研究二三号。

母子愛育会（編） 一九七五 『日本産育習俗資料集』 第一法規出版。

鬼頭宏 一九七八 「徳川時代農村の人口再生産構造―武蔵国甲山村、一七七―一八七一年」 三田学会雑誌七一巻四号。

社会事業研究所 『墮胎間引の研究』 非売品。

山住正己・中江和恵（編注） 一九七六 『子育ての書3』 平

凡社。

或る年、春がきて、私は幼稚園へ行くのだと言われ、房のついた帽子をかぶせられた。胸にはハンケチを安全ピンでとめ、簾で編んだ弁当入れのバスケットをもたされた。それが当時の幼稚園児の恰好であった。たぶん小学校へあがる一年前のことだから、昭和五年ということになる。

そのころ笹塚は、震災後の新しい住宅地だった。家の前に川があり、橋を渡って川沿いの道をゆくと、川下に幼稚園があった。生垣にかこまれた庭には、ぶらんこや滑り台のほか、新式のジャングル・ジムがあった。

天神さまの太鼓橋

子どもたちはジャングル・ジムに群れたが、

私の関心は、もっぱら砂場に向けられた。

ふつうの家の小さな砂場とはちがって、幼稚園の砂場は格段に大きかった。砂場いっぱい自動車を作ると、オープン・カー（そのころは幌自動車といった）の座席に子どもが四人は坐ることができた。こわれないように、みんなそっと乗

大宮真琴

り降りした。どういわけか、ほかの子が作るとうまく出来なかつたので、みんなは私に期待した。そんなわけで、朝いちばんに砂場で自動車をつくるのが日課になった。

室内にも面白いものがあつた。板戸の押入れの中に、コルクで作つた積木の化け物のようなものがあつた。はじめは呆気にとられたが、やがてこれを使って本物の家を作ることと思いついた。壁には窓をあけ、身をかがめれば入れる玄関も

あり、室内には子ども椅子を運んできた。これが人気を博したが、難点は、へたに身動きすると壊れてしまうことだった。だから先生が仲間に入ろうとすると、大声をあげて阻止した。

遊びに興じていると、誰も家に帰ろうとしなかつた。先生も、早く家に帰りなさい、と言つたことはなかつた。

はじめは嫌々だった幼稚園も、けっこう楽しいものになつていったが、私にはひとつだけ、どうにも我慢ならないものがあつた。お遊戯というやつだった。手をつないで輪になり、歌など歌うことは女の子のやることだ、と思ひこんでい

たから、私はけつして仲間に加わらなかつた。

帰り道にも、いろいろすることがあつた。川沿いの道には団栗（どんぐり）の太木が並んでいた。団栗の実は、遊びのときの通貨だつた。からになつたバスケットにいっぱい詰め

て帰り、近所の小さい子たちに、あとで分配するのである。面子（めんこ）と団栗は子どもたちの貴重な財産だつたからみんな自分の隠し場所をどこかにもつていた。

川向うに天神さまがあつた。天神さまの境内に行くには、橋をわたつて、ぐるっと回つてゆかなければならなかつたが子どもたちはいつもそこへ集つた。

天神さまの小さな祠の前には賽銭箱があり、鰐口の紐がぶらさがつていた。団栗の大きいのを選んで賽銭箱に入れ、それから、色とりどりの布を緞いあわせた太い紐を引っぱるのだが、子どもの力ではどうしても鰐口は鳴らなかつた。まゝくなくて、一人ずつ試みるが、どうしても駄目だつた。たまに大人が通りかかき、よいしょと紐を曳いて鳴らすことがあつた。すると鰐口は醜い音をたてた。子どもたちは胆をつぶして四散し、木の下に隠れて様子を見がうのだつた。

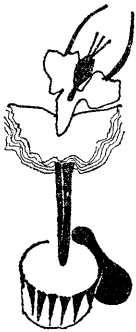
天神さまの境内に、石の小さな太鼓橋があつた。これは幼

稚園新式のジャングル・ジムより、ずっと魅力的だつた。ひとりひとり順番に太鼓橋に挑戦したが、うまく上まで駆け上れる子は減多になかつた。前の日に成功しても翌日は失敗するという案配だつた。一同まるくなつて、固唾を呑んだ。成功する子がいると歓声があがつたが、下りにはきまつて転がり落ちた。

天神さまの境内から、夕焼けが見えた。西の空が赤く染まると、手をつないで歌う時間だつた。はじめの歌は、からすなせ啼くの、だつた。それから、かごめかごめ、があつて、最後はいつも、通リヤンセ通リヤンセ、になつた。

天神さまの境内では、男の子も女の子もいっしょに手をつないで、通リヤンセを歌つた。天秤棒をかついで通る夕方の物売りの声に負けじと、誰もかれもが大声で歌つた。そのときには、幼稚園でのお遊戯への拒否反応はなかつた。

（お茶の水女子大卒）



子どもとの出会いの中で学ぶこと ③

水 沼 昭 子

夏休みが終り、どの子も園生活の中での、自分の場、遊びを取りもどした九月中旬、いつも走ってくる年少のTが幼稚園の門のところで大泣きしている。近づいて声をかけても泣き声はやまない。付添って来たTの祖母が小声で、Tと母親の「朝の出来事」を伝えてくれる。それによると敬老の日を前後して三週間位かけて子ども達が出す、おじいちゃん、おばあちゃんへの「お便り」が原因らしい。「お便り」は園でのスナップ写真など、先生や子ども達のお手紙、絵、その他折紙など、書いたり、作りたくなった時に順番に先生と作る。そしてポストに入れに行く。子どもの、一人一人の取り組み方を大切にしながら毎年続けて来たものである。

Tの母親は仕事を持ち、気ぜわしい朝の、その心持ちの中で、この「お便り」の絵をまだかいていないTを叱った。Tにとっては、「まだ、かかない」であって「もう、かかない」ではなかったのに叱られて、しかも練習までさせられた。大

泣きしているTの手に、その絵がにぎられている。そして、この練習の絵には「もし、幼稚園で描かない様なら、これを使ってほしい」と云う母親のメッセージが付いていた。この報告を聞きながら、内心Tにすまない事をしたと思う。そして困ったとも思う。なぜなら、この「お便り」をはじめて直ぐに、新しい事に敏感に反応するTから予想通りのことばが返って来たから。「ほく、そんなのしないよ」……Tにとつてやりたくないけれど気になるこの「お便り」と、どう取り組ませようかと考えていた時の出来事だった。少しずつ、切手を貼るのを手伝わせたり、封筒をはこんでもらったりしながら数日過ぎていた矢先の事だった。Tにとって、またこの「お便り」が重く、いやな事として心にひろがった事を感じた。一斉にやるのではない私達の園の活動を充分母親に伝えていなかった事に気づかされた。送り迎えの道で付添いのおばあちゃんは心配だったに違いない。「お便り」の話題がで

て、Tがまだやっていない事が気になったに違いない。その
気持で母親に伝え、Tの大泣きの「出来事」となったのである。
母親は新しい事になかなか取り組まないTの、いつもの
くせをしようとしたらう。それがどうしてなのかよりも、皆と
一緒にしないことが気になっていたと思う。Tへの配慮だけ
を考え、家庭への連絡、配慮をしなさいでいたことを気づかさ
れた。

あいかわらずTは園庭に入らず泣いた。祖母には帰っても
らう。心配して迎えに出て来た担任のT先生やクラスメイト
がまわりをかこむ。泣きやまぬTをしばくして散歩にさせ
る。緊張している思いから遠ざけてやりたいと考えて担任に
許可を取り、Tと私の朝の散歩がはじまった。「T君、いつて
らっしゃい！ 先生まっているネ」先生の声を背にして泣き
ながら、でも何かほっとした様な気持がTから伝わってくる。
手をつないで、だまって歩く。道々、くずの花が咲いてい
たり、たんぼぼがまだがんばって花をつけているのを知らせ
てもTは、だまって歩く。けれど少しずつTの気持がおちつ
いて行くのを感じる。つないでいる手が強くにぎられていた
のに、だんだん、やわらかく自然に手をつなぐ。

「ずいぶん、大きな声で泣けるんだね、先生びっくりしち
ゃった」と何気なく話をする。Tがはずかしそうに笑う。ま
たしばらく歩く。「T先生もおともだちも、みんな待ってる
よ、そろそろ帰ろうか——」。Tがうなずく。帰り道、くずの
花をつんで、くずの葉でつつんだ花束をつくる。みんなへの
おみやげ。Tの足が少し早くなる。友だちの遊ぶ声が聞こえ
てくる。Tが小走りになる。幼稚園の垣根のところまでTと私
の姿をみつめて、T先生とクラスメイトがかけよってくる。

そして大きい門を皆であけて迎えてくれる。Tの耳元で私が
云う。「T君、先生におはようっていつてらっしゃい」。Tは
スムーズに門を入り、大きなT先生の、また耳元で朝のあい
さつをする。そして自分の部屋へ飛び込んでいった。Tにと
って、大好きな園生活に、この朝だって泣かずに入りたかつ
たに違いない。Tのもつ遊びや物への関わり方、願いをいっ
ぱいもつていたに違いない。走りさる後姿を見ながら、「お
便り」を今後どう関わらせるかと云うこと以上に、一人一人
の園生活での配慮は、家庭への配慮でもある事を重く再確認
した。Tのこれ以後の園での姿を次号で書いて行きたいと思
う。

(千葉・愛隣幼稚園)

『保育の体験と思索』

津守 真 著

大日本図書

一九八〇年

の息使いが聞こえてきそうである。そして氏が何に心を砕いているかが伝わってくる。

氏は三つの保育の場を持っている。ひとつは幼稚園であり、ひとつは知恵遅れの子どもの達のグループであり、最後のひとつは現在青年期に至っている氏自身の家庭の子ども達である。このこと自体、驚異的なことであるが、さらにこの三つの場が互いに支え合って子ども達の姿をより確かなものとして浮び上らせている。目先の成果に走ることをいまいしめ、長い時間経過の中での幼児期の意味を問い返しつつすすめる省察の姿は、私達に人間の重みを伝えてあまりある。

さて、前置きはこれくらいにして、一、二節紹介してみることにしよう。

この書物の名は、本誌読者の方々には

もうすでに親しいものである。「子ども

の世界の探求」と副題をそえられたこの

連載は、四年間もの長い間、私達に様々

な子ども達の姿を開示し、そのたびに保

育に新たな光をなげかけてくれた。この

ような経過があるので、今ここであらた

めて紹介することは不必要なのかも知れ

ないけれど、私はあえて今一度、ぜひこ

れを一冊の書物として手にとっていただ

きたいと心から思う。

氏自身が、世に言う「保育理論」を前

面に出さない方だということもあり、一

冊の書物としてまとまりをもたせること

により、氏の保育思想の核心により深く

接することができるからである。また、

この書物は三十七の章にわかれていて

が、折にふれてどの一節からでも読み返

すこともできる。さらに巻末の索引もま

たユニークである。ここからも子ども達

白紙のノート 十二月二十七日

Kは白い画用紙を三つに折り、はさみで切り、ホチキスでとめ、白いノートを作る。次々に数人の子どもが同じような白いノートを作る。

Kは白い画用紙をはさみで切ってホチキスでとめ、白いノートを作った。何冊も作ってそれを持ち歩いてきた。白い紙を切り何もかかないで綴じてノートを作るといふのは、このころの子どもの好んで作るもののひとつである。おとなは、もったいないから何かかいたらといいがちなのであるが、これは白紙のノートであることに意味があるのではないかと思う。

ちょうどこのころに、ある子どもたちは数枚にわたるつづきものの描画を描いたり、それにおはなしをつけたりする。

こういうことから考えると、何もかかない白紙を重ねてノートを作るとき、子どもの頭の中にはすでに、いろいろの構想

が形にならないままに渦を巻いてあるのではなからうか。白紙のノートは、つづきものをかきこんでいくことのできる、いろいろの可能性をもった空間である。

子どもの遊びの展開を見るときも、同様のことがある。遊びにおいて、次にどういう考えを出していくかは、子ども自身に委ねられている。どのような理由であれ、それがきめられていたら、遊びではなくなくなってしまふ。未来は子どもにとっては何もかかれていない白紙のようなものである。現在において、そのような未来をもつことができるとき、子ども自身の内側からイメージが湧き起こってくるであろう。それが次の瞬間の遊びを作る。

白紙のノートを作って持ち歩いている子どもの姿を見ると、さまざまな可能性をもつ未来が察せられて、何か豊かな気持ちになる。そこにはいつか、思いもか

けない物語りが描かれていくであろう。それはときがきて、子ども自身が作り出していくものである。

次に、「入園を前に心躍らせて待つ」という題をつけられた第九章に少しふれてみたい。この書物全体の中で、「家庭での子ども達」は、資料が具体的に示されるだけに、私達に直接ひびくものが多い。

Kは入園前の一、二カ月、幼稚園という新しい生活を前に期待に胸をふくらませて時をすごす。一番お気に入りの帽子をかぶった女の子の絵、何人も手をつないだ子どもの絵、「さくらんぼをとっている子」と名付けられた自分自身を描いたはなやかな絵、そして入園式前夜のうれしいなー、うれしいなー、あしたはMちゃんと幼稚園にいくんた。お友達が十人も百人もできた」ということば。

だが、入園式の日には口もきかず家に帰り、翌日はたった一時間半ほどの「幼稚園」のあと、「もう夕方？」と聞く。そしてこのあとこの子どもは内部にひきこもり、再び外に関心をむけるまでに一年以上を要したという。

前段のこの子どものはれやかな姿を見て、「幼稚園入園」ということがこんなにも子どもの生活を明るくするということ、そしてその後にくしく失意の日々に、私達は痛みを感じないではいられない。保育という営みのきびしきりにつ然とするのは私だけではないと思う。

この書物の最大の魅力は、著者によって開示される生きた子ども達の姿であろう。それは子どもという存在自体のもつ生命性なのかも知れない。しかし、私達は氏という案内人を得てはじめて知りうるものでもある。おそらく、氏自身は「案内」などしているつもりはないであ

ろう。氏は「子どもの世界」という未知の空間に、一人の大人として身を置いていただけなのかも知れない。子ども達の前には一人の人間であるうとする氏の真摯な姿が、逆に私達を子どもの内面の世界にまでひきこませてしまうのであるう。

それは自分自身の全存在をかけて対象を理解しようとする仕方であり、これがそのまま、子どもにとって大人とは何か、大人にとって子どもとは何か、そして人間にとって子どもとは何かという基本テーマにつながっていくのである。この本を読みながら、自分自身がよみがえるような体験をする方が多いと思う。それはこのような氏のあり方がそうさせるのだと思う。

最後に氏の保育思想に少しふれてみたい。氏のことばを借りるならば次のようになる。

「幼児が自分自身を打ちこんで、ひた

むきに遊ぶ姿を生み出すところに、保育のはたらかがある。ひたむきに遊ぶ幼児の姿には人を魅きつける力がある。

このような遊びの具体的内容は、多くの場合、あたりまえのごたごたした行動にすぎないので、幼児教育という正規のルートを考えるときには、その価値を認められないことが多い。しかし、遊びの中で養われている諸能力には、他のいかなる方法による教育的活動におけるよりも、大きなものがある。また、その中で、人間の生涯を通してつづく人生の基本的経験が養われている。しかし、それらの効能よりも、幼児が楽しく遊ぶこと自体が価値があり、そのような幼児をつねに傍にもっていることは、おとなにとつての喜びである。

むかしから、子どもは遊ぶことよって人間となってきた。現代においても、遊ぶ姿を実現することは保育の中心課題

である。」

私達は氏によって示された子ども達の発達の様を通して、「遊ぶこと」が彼らにとって生きることでそのものであることを知った。しかし、「幼児が自分自身を打ちこんで、ひたむきに遊ぶ姿」を実現させることに心を砕いている保育の場合は、残念ながらそう多くはない。現在、子ども達にかかわる多くの大人は「子どもの発達の姿」を追い求め、それぞれに献身的な努力をしているのだと思う。そんな中であって、ただ「ひたむきに遊ぶ姿」を実現させるといふことは、最もまわりくどいことのように映るのかも知れない。しかし、それが最も子ども自身を生かす、そばにいる大人達をも生かす道であることが、大人達によって納得されていないのであろう。そうであるとすれば、子ども達の遊ぶ姿を通して、彼らと

それに関わる大人達の発達の姿を浮き彫りにしていくという保育学の中心課題はまだまだ追求され続けられねばならない。

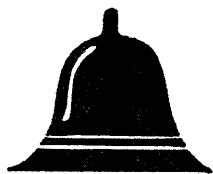
ご存知のように氏には、「乳幼児精神発達診断法」という有名な著書がある。二十年も前に乳幼児の行動の詳細な観察記録を基礎資料として作成されたものであるが、現在もあちこちで使用されている。しかし、氏自身も語っているように、それとこの書物との間には、子どもの見方に関する視点の百八十度の転回がある。「子どもの行動を科学的、客観的に見ることに固執していたのでは、精神をもった人間の理解には至らない。行動は子どもの世界の表現であり、またおとな自身の動きの中でとらえられる現象である。保育者の目はこれである。」と断言し、「今回のこの書物の基礎資料はい

ずれも、私自身が、保育者として、子どもといっしょに、遊んだり、生活したりした体験の記録である。こういう方法をとらなければ、もう一步、子どもの世界の真実に近づくことができなかった私自身の児童研究者としての過程でもある。」と結んでいる。

私達は、この書物の成果だけをとり入れることに腐心してはなるまい。それぞれが、それぞれの方法で子ども達の行動をとらえ、その意味を読みとく作業を重ね、子どもへ至る道、子どもと通い合う道を少しでも広く豊かなものにしていかねばならぬと思うのは私だけではないだろう。

(山口大学 友定啓子)

私の子供時代



内田光子

私、びっくりすることだらけです。日本では。私の年代の人にあってもね、なんでこんなに、平均に近づこうとする人たちがばかりなんだろうと。試験を受ける、受験をするということ自体も、平均よりちょっとよくなるうっていうためでしょう。でも、仕事しても落ち着こうとする。会社に入ったら出る釘は打たれるから、出ないようにしてね、いかにしてうまくやっていくかということだけ。そんなこと何のためにするのかと思う。結局は、全てがステップなわけでしょう。男の子は、幼稚園に入っ

て、なおかつ幼稚園に入る前から受験勉強するのは、つまり就職先にかんして出ない釘になって落ち着くか、のためでしょう。だから、実に不思議なことだと思っ

てねえ。

お茶の水の幼稚園の生活、私は全くしあわせだったと思っています。幼稚園、小学校で受験勉強をさせるなんて、全く、ヒドイ話で、こんなことは、神経衰弱をつくっているようなものです。

私は、十二の時にヨーロッパに行っていなかったら、ピアノにはなっていなかったと思います。というのは、日本では、音楽学校とかいろいろありますけどね、どっちをとるかといわれた

ら、私は、大学へ行っていたと思います。だから、ヨーロッパに行ったということによって、音楽家の道へ進んだのかもしれないと思っと思っています。あの状態で音楽を勉強していて、私、桐朋系でしたからね。

あれは、子どものときに行ったのがよかった、と思います。幼稚園のときの村田先生のおかげさまでね、チビのときから、目白の子どものための音楽教室へ行っていたのね。

けれども、自分で疑問を感じて、何をとるかということになったら——もちろん、判断力を持っていなかっただけかもしれない——もし、判断力を持っていたらばね、音楽家にならなかつたかもしれないのね。そこまでいい切るの、問題ですけど……。

ピアノを弾く……音楽を創る、ということとは簡単じゃないと思う、漠然とタラタラ弾いていることではないですね。……そのまま、社会にはまって暮らしていったらうと思います。

小さいときは、一日三十分ピアノを弾いていました。小学校へ行くようになって、だんだんゴニョゴニョいわれてね、あのう、親同士の会話からいろいろと話があるんですよ、なんとかちゃんは一時間半やっていると、二時間やっていると、意外と覚えていたんですよ。そんなこといわれても、こっちはピンとこないしね。幼稚園のときは、自分で三十分、と決めていたんですね。

桐朋のもっと上の方に通うようになってから先生についてのですが、先生のところへはじめて行ったときに、三十分しかやってないって話をしたら、マアとあきれかえられて、一時間は最低やってもらわなければ困ります、っていわれたんです。だからまあこっちは、さばよんで四十五分とか、そんな具合に増やしていったんですけれど(笑)。まあ、ピアノなんて、そんな、誰でも弾くことはできるんですね。

私のおくった子供時代

幼稚園時代は、私はわりに弱虫だったの、今でも私は、最終的にはそうだと思うけど。兄弟がいたんだけど、どちらかというと、チビのときにわりに一人でおかれたことが多いんですね。三歳のとき、熱海から出てくる……兄が小学校で、私が幼稚園で、姉が中学へ編入試験を受けるといふときで、まあ、チビなんでもこの幼稚園行つたつてかまわない、という……それよりも、兄貴の小学校の心配の方が多かったようです。

普段、私は、本を読むのが好きでした。読み書きは好きです。ですから、本を山のようにボンと私の目の前に置いて、私をボンと家に置いて、母はいろいろかけずりまわっていたと思いま

す。私は家で一人で本を読んでたつてことを、はつきり自分で覚えていゝるんですね。

幼稚園に行つても、どつちかというあまりギアギア仲間になつて遊ぶというよりも、一人ボソンとしてゐることがわりに多かつたと思います。でも、いっしょに遊んでましたけれどね、完全に仲間はずれになるつていうのではなくてね。お絵かきなんて、覚えてるわ、とても楽しかつたの。二人ぐらゐ、とても仲良しがいてね、そのうちの一人がとてもおませさんだつたの、そう、けい子ちゃん……色には興味があつてね、「その肉色のクレヨンちょうだい」なんて、へえ、肉色なんてはじめて聞いたと思つたのね、肌色つていうのは知つていましたけれど……そんな記憶があるのね、だから、お絵かきが楽しかつた——つていうの覚えてるのね。いろんなえのぐがあつて、みんなで好きな色でいろんなのかいてね。

ピアノを人前で弾くのは、とてもきらいでした。ほんとにきらいでしたね。もう、それは、嫌悪以上にきらいでした。普通に、きらいで、やだ、なんていう以上にいやでした。だから、幼稚園時代から、ちょっと弾いてつていわれるのがなによりいやでしたね、それはもう、小学校時代もずっと……。だからね、十五、六になつて、親と離れてウィーンに留学生として残つちやつて、一

番うれしかつたのは、ちょっと弾いてつていわれることが絶対なくなつたことですね。

舞台上「弾く」と思つて用意すればいい、家にお客さんが来たからちょっと弾いて、つていわれるのがなによりいやでした。だから、自分が人前で弾くのがいやなんじゃないか、という、決まつてしまえば、いいわけね。おさらい会があるから弾かなくてはいけない、ウィーンにいても先生の発表会なんかに出されるのね、それはいいわけ。何百人いようと、それは関係ないんですね。

今は、そんなでもない、今はね、だつて、これで食べてゐるからしょうがないのね(笑)。それに、今になると、そういうことをいう人がいなくなつたからね、だからいいの。

小学校へ入つてね、二年生になるまで、担任の先生は、私がピアノやつてゐること、知らなかつたと思います。でも、みんなでオルガンやる、なんていうときになると、目立つちやうからわかつてしまいましたけれど。

ですから、自然な状態では、私は絵をかいてゐる方が楽しかつたのね。それから、お砂場とか、すべり台が好きでしたね、それから、鉄棒が好きだつた……そして、ボール投げは好きじゃなかつたのね。一人で何かやるのが好きだつたんですね。小学校へ入

ってからも、一人で鉄棒ばかりやっていたの。

今は、分別がありますからね、いやだ、なんていいませんけれど、小さいときは、死にたいほどいやだったのね。だから私は、子どもが人前でやらせられるのがいやなのが、よくわかるのね。やりたがる子は別ですけれど……。やりたい子と、やりたがらない子に分れるはずなのね。やりたがらなかつたら、絶対やらしちゃういけない、と思うのです。——それ、おもしろいのね、ほんとうに、演奏会で舞台に出る、というのと全くちがうんですね。

あつそれからね、幼稚園でお買ひもの遊びなんてした印象があつて、そんなのが楽しかつたとかね。とても今の、他の幼稚園の受験勉強のようなものとは、全くちがいましたね。あれが、いろんな意味で、私はヨーロッパの幼稚園なんかよりいいんじゃないか、と思うんです。もちろん、それは場所によるでしょうけれど。ドイツ系の幼稚園なんというのは、ただただ子どもを預る、という感じだね。いろんなことやれて、集団生活がある程度経験できて——やはり、家の中ではどうしても甘えがでる——そういう意味で、私のおくった幼稚園生活はよかつたと思えますねえ、
今考えても。

私の歩んだ道

十六までは、ウィーンで両親といっしょでした。それから、父がドイツに行つてしまいました。その時十六でしたから、もし、ドイツに行つてしまつたら、そこで高校を卒業して……。そうしたら、完全に音楽家にはならなかつたと思います。それは、この段階で、すでにどつちかに決めなくてはならなかつたからです。

十八、九歳で、高校を卒業して、また試験を受けて、なんていうことをしていたら、プロとしてはやっていけないと……。それだけきびしいもので、この段階で決めなければなりませんでしたが、自分で食べていく、というところまでは考えていなかったですね。家族が全くそんなことを考えていませんでした。女なんていうのは、うちの母をみてもわかるように、女はどうせ家庭に入るもんだというふうに思っていましたし、女が自分で生活するなんて全くいけないというのではなく、そんなことがあるってことすら、考えても出てこないですね。

演奏活動をするといつても、プロっていうより、半分アマミタいな、そんなイメージしかないわけです。だけれども、そうなら

そうなりに、なにか高校まで卒業してそうしていると悪い遊びになる、というように思いましたので、十六からは、音楽大学に行きました。

音楽大学といっても、外国の場合はちがいますから……音大は十二からですので、普通の中学と両方行きました。演奏部門というので、最低年齢十二歳、この他に教師課程と、演奏家のための演奏部門とあったのですね。ピアノ科もヴァイオリン科も、こちらの方は十二歳からでした。音大の課程は当時八年ですが、大人になつて入れれば一年です。八年というのは、ほんとうに子どもの時から入った人です。十五で入っても、二十三歳なわけですからね。または、十八で入って八年なんていうのは、全く形ばかりのものです。副科をとってれば、一年でも卒業できるので。副科というのは、音楽史とか、楽理論とか、和声学などですね。

学校の生徒は、一人で学生寮に入っていました。下宿っていうより寮に入ったことは、とてもよかったと思います。十八歳から大学生用の寮でしたけど、ちょっとさばよんでインチキして……。寮生活は、全く自由……門限だけありましたけど。カトリック系の寮でしたから、外泊も許されていました。どこへ泊まる、ということがちゃんといってあればいくらでも。

門限は、私が行ってからも、だんだん遅くなりました。十一

時、それから十二時になったと思います。それより遅れる場合には、門番さんに届けておいて……罰金があったかしら、そう、時間ごとになにかあるんですよ。門番さんを待たせるわけですから。音楽会の後は、十一時の門限には、大体間に合うようになっていました。遅れる時は、それを前からいっておかないといけないのです。

あとは、何一つ、束縛なしでした。ただ、寮だから、壁は薄いしね、隣の声が聞こえて、食事は悪いしね。でも、ちゃんと自分でつくれる設備はありました。

もうその時は、演奏活動をしておりましたし、最終的には、先生がその演奏についてコントロールして下さいましたし、そんなに回数なんかやるもんじゃなく、という……。親の方は、演奏会なんかしなくていい、という考えでしたし。

それやこれやで……、もちろん、使おうと思えばね、いわゆる、なんていうのかなあ——子どもでうまく弾けるといっているのでねえ。使われなかったのが、たすかった。それは、うちの親と先生のおかげだと思います。私にはまだ判断力がなくて、決められませんでしたからね。

自分の興味から出発

日本は、すばらしい芽を持ったお子さんが少ないように思いますが。平均的にはいいんですね。向うの場合は、平均のところへいくまでの人すら少ない、ただやっていると、すつとんきょううまいのがボンボンといるんです。

日本の場合、これだけ平均的に弾けているのに、どうしてそれ以上が少ないんだらうと、不思議なんです。向うは、そこまでいっている人の数は、非常に少ないんですけど、そこまでいくんだったらもっと伸びる人がいるわけです。

だから、ピアノやっている人の数からいったら、日本は異常に多い、その代わり、演奏会へ行く人の数は異常に少ないんですね。そして、音楽学生っていうのは、音楽に興味がない。ピアノ弾く人は、音楽学生じゃなくて、ピアノ学生なんです。ピアノばかりガチガチ弾いている、そしてオーケストラの曲なんか聴いたことがない、そんなことでいったい何ができるようになるか、です。

子どもにバイエルなんかやらせて……私、よかったのは、子どもの時に家にレコードがあったことです。だから、音楽を聴いて

いました。聴いたことがなくて、バイエルやらされたら、いやんなってやめていたと思う。あんなつまらない意味のないもの、なんのためにやるのか……ゲソソリするに決まっているもの、子どもは。

それはね、目隠しをしたまま、子どもをすつと何も見せないで、灰色の部屋に閉じ込めておいて、えのぐだけ出して、ハイ、絵を描きなさい。絵のテクニクはこうです。そして、この色はこう使え、と教えこむわけね。そうしたら、子どもは絵をかけたこないわけね。自然の木を見たことない人に、木というのはこういうもんです、というのに近いことなですね。音楽を聴いていないで、まあまあ、あきずによく弾けるものだと思うぐらいね。

これは、おもしろい、不思議な現象ですね。ヨーロッパにいると、さすがにそういう現象はないですね。音楽を聴くチャンスは多いし、その代わり、技術的に、実際にピアノをやるっていうのは、日本で教えこむある程度のテクニクまでやる、っていうのは少ないんです。ほんとうに興味があればやりませんから。日本は、おもしろいことに、ほんとうに全然興味がないのに弾いている人が、けっこうたくさんいます。

私が受けた、お茶の水の教育——幼稚園、小学校ともに、たいへんよかったです、と思っています。ヨーロッパでも、あそこまでい

いものは少ないと思っています。それは、いい切れると思いません。ただ、私は、ある一つの特特殊な学校の例だけでしよう、それで国全体のことはいえないと思います。ただ、ヨーロッパの場合は、年齢が小さければ小さいほど、つめこみませんから。

様々な興味、様々な道

でも、特殊学校になると、今度は異常につめこみます。ある種のものだけは、異常に程度が高いんですね。日本はわりに平均的です。国によって、その程度はちがいます。イギリスあたりは、政府が変わって、学校制度も少し変わってきていて、悪いといわれている面と、よいといわれている面があるんですがね。

私は、いろいろな種類の学校をおくことには賛成ですね。人それぞれ、向き不向きがあるでしょう。もう全く数学の数字を見たくもない、わからない子はね、ちがう才能があると思うんです。そうしたら、みんな平均的にできなきゃならない、というのはウソだと思いませんか。もちろん、程度問題ですけれど。1+1=2ぐらいは知らなければ困りますけれど、もつと上になってから、1+1=2だろうか、と考えこむようになれば、その辺は、その人の勝手としてね。

でも、平均的にできる、ということ、私は必要じゃないと思うのね。だから、音楽にしか興味がない場合は、中学からそっちの学校へ行っていていいと思うのです。ドイツ系の学校は、そういうように分かれていますね。ギリシャ語、ラテン語が入っているのは、特別の場合、クラシックといわれているところの勉強を主体とした学校です。それはかなりハイレベルの学校です。

オーストリアの場合は、ラテン語をするかしないかは、中学の一年の時に分かれます。大学へ行きたいという人は、ラテン語をとります。だから、ラテン語というものを中心にどっちへ進むか、ということになります。あとでもとることはできません。

大学へ行こうという考えを持つ人は、ヨーロッパでは非常に少ないんですね。大学へ法科へ行つて弁護士になって自立する、という人でなければ、そんなばかなことはしませんよ。大学に行つたこと、それを利用して、自分がそれを生活に使う。日本だったら、特に女の子で大学に行く人は、大体みんな、あのう、お見合のときにね……、八〇パーセントぐらいそうでしょう。もちろん、向うでもけつこういるわけですね。お見合の慣習がありませんか、自分で結婚相手を見つけるために大学へ行っているんじゃないか、と思うような人もいますけれどね。それでも、勉強して法律事務所へ勤める、なんていってましたからね。

ヨーロッパの場合、子どもを養うっていうんじゃないんですね。女であっても、大学まで出してもらったら、もう自分でかせぎなさい、大体十八歳までを限度に、大学はもう自分で奨学金をとって進みなさい、という場合が多いんですよ。日本は、ことに女の子の場合は、嫁にいくまでは家にいる、そんなのが多いですよ。その辺の観念が随分ちがう。

だから、ヨーロッパでは、大学へ奨学金で行っている人が一番多いんじゃないでしょうか。大学生が少ないんですね。日本では、親が投資したものは、あとで義理で返す、というようなねえ。

そんなことで、日本の、小さい子どもに対してとっていることは、全く気持ちが良さだではないか、と思います。こんなことして、ほんとうに神経衰弱かバカをつくっているようなもの、こんな小さい時に教えこんで、記憶力以外何も使えなくなるんじゃないかしら。自発的に何かすることが全然できない、自発心ゼロの人間ができてしまうのではないのでしょうか。子どものときに、自分なりに考えて、やりたいことは何かをつかむ、それを十分にしておくことね。

ハンディを越える

日本語というのは特殊なことばでしょう。他に関連性のないことばだから、そのハンディキャップは、たいへん大きいんですね。ヨーロッパは、横につながりがありますね。

私が外国へ連れられていった時は、変化が激しくて、つらい思いをしましたからね。だから、子どもっていうのは順応性がある、というのは嘘八百ですね。それは、自分の体験からいえるんです。小さければ小さいほどことばが早い、なんていうのもウソ。子どもはわからないから、その代わり、抵抗がない場合には早い、それはつけ加えなければなりませんけれど。子どもは、抵抗さえなければ早い、ということなんです。

幼稚園から向うへ行つて、ひとつもしゃべらないお子さんを知っていますけれど、それは抵抗があるからです。日本語はペラペラで、三つの時から向うの幼稚園へ行っていて、一言もしゃべらない、その辺が問題でね。

だって、日本は、外国との動きが多いようで少ないでしょう。でも、ほんとにチビのときから、毎日 生活の中で、たとえば両親が国際結婚していると、子どものときから二つのことばを聞

いて育っている場合には、そのハンディはないですけれどね。家に外人の出入りが多いとかね。

私は、たいへん抵抗ありました。つらいことはありましたね。ことはなんて、私も長いことしゃべれなかったんです。わかっていてもしゃべれないですね。しゃべり出しても、それからドイツ語を読む、ということにすごく抵抗を感じました。学校そのものは、すごく程度は低かったですけれど、その上ピアノがありましたから。

子どもは、ある程度の変化には弱いですからね。大人の方は、自分でこうしたいと思って動けばいいのだけれど、子どもは親が行くから、あんたもいっしょに来るんだよと、自分が行きたくないのにそんな所へ連れていかれちゃって……。あんなに幸せに学校へ行っていたのに、ちがう国へ行って、ちがうことばで、氣候はちがう、風土はちがう、でしょう。頭は神経質になっているのに入っちゃったし、たいへんなことでしたね。それで、たまたまない思いもしました。

このことを乗り越えたというのはね、克服したというよりも、生命力だと思えます。私はわりあい生命力はある、と思えますから、今、私がちがう国に行ったとしても、三カ月後には、もうその国の新聞が読めるだろう、と思うのですね。ロシア語を全然知

らなくてもね。そういう自信はあります。

ことばっていうのは、ある種の慣れですからね。簡単なんです。わかってしまうと。ただ、いいアクセントとなるとね。私が電話で英語をしゃべっていると、オーストリアかハンガリーの人とまちがえられます。ですから、ドイツ系のアクセントなんです。この頃、隠すのがうまくっているから、ハンガリー系のユダヤ人っていうのが、一番適切な表現でした。

私は、子どもの方がつらかったですね。たとえば、家庭にいた子が幼稚園に行くでしょう。でも、少しでも知っている所はね、いいんですよ。全く知らない所へ、ボンと行くのはねえ、非常に大変なんです。大人が考える以上に大変で、努力をしているんですよ。

だから、子どもを持つって大変だと思ふのよ。子どもが、何もわからないことにとりくんでいくのが、いかに大変かということね、その記憶がとても強く残っていますね。でもこれは、人それぞれちがいのあることだと思えますけれど。そして、他の子と自分がちがうんだ、ということをはっきりわかる、というわけにはいかないでしょう。

小さい幼稚園の頃って、子どもよりも親の方が大変なんじゃないかしら。ある意味で、たいへん幸せなのは、親がよかった、と

いうことです。これは、子どものときはわからない、大人になってみなくてはわからないのね。見てみると、わりに音楽家ってアンバランスな方もいるのですよ。大体、家庭のことが原因なのね。

これを「しろ！」っていわれたことがないのね。ただ、本が好きなだといったら、本が山のように家にあつてね。しょっちゅう本に親しんでいました。私は、人間の思考力はやはりことばで最終的に育つんだと思うので、広範囲にものを読んでいるということが大切だと思います。やりたいこととしてたら全部覚えるけれど、やらされたのでは……。

自己主義の主張

結婚したから家庭に入る、ということは考えない。私は、かっこうをつけると、完璧な自己主義なのです。私は自分で、絶対音楽家として生きたい、という考えがあるんですね。どんなことがあっても。だから、結婚しない、とはいい切れないし、結婚したからといって……私と結婚するような男性がいるとしたらね、向うも身から出たサビなんです。

でも、子どもだけは考えます。なぜなら、子どもは知っててこんな母親と会うわけじゃないし、自分で選んだんじゃないからで

す。旦那の方は、知った上で結婚しようとしたんですから。子どもをつくったら、それは考えるでしょうね。もしも子どもをつくったら、教年間はエネルギーをうんと制限するでしょうね。制限するっていうことはできるんです。そういうこと考えるでしょうね。

だからといって、全部を子どものためにつぎこむことはしないでしようね。私のエネルギーを全部つきこんだら、こんな不幸なことはないと思う。それじゃとても、私のように我の強い母親を持つたら大変なんですよ。

私は、自分のやりたいことをビシッと持っていてね、私は自己主義である、ということ認めないと、人間まちがいをおこすのよ。あなたのためにやっているという……。自分を捨てる、という行為を見ている自分も、ほんとうはそうありたいんだと、そこまでいわなくてはね。犠牲になっていて喜びを感じているんだ、というところまで……。

(ピアニスト)

『復刻・幼児の教育』〈大正・昭和篇〉

〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児教育の発展と歩みを共にして来た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究発表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の発展に測り知れない寄与を成して来た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』第一期・明治三十四年～大正九年に続き、大正十年～昭和十九年の二十四年分、二十四巻を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、

現代保育を考える人々に資することを念願する。

〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引

〈第二巻～第四四巻〉大正十年～昭和十九年

『幼児教育』(第二三巻第八号まで)

『幼児の教育』(第二三巻第九号以降)

〔刊行〕 名著刊行会

〔定価〕 現金価格二二五、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三一二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五―三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江町三一六一―二三

TEL (〇六) 五三一―九八〇一

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよそくいただきますことを、期待しております。

〔記〕

一、第一期、第二期の復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚

以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ先及び応募先

〒112東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属
幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話でのお問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

「移り舞」という言葉がある。古語辞典によれば、「誰かの舞をまねて、あるいは誰かの身になり変って舞うこと」とある。とすれば、子どもたちが身につけていく日常的な生活行為のあれこれは、「移り業」と呼ぶことも可能であろうか。いつか身につけてしまふ母親そっくりのしぐさは、前者の例であらうし、「ままたごと」で演じてみせる母親そっくりのふるまいは、後者の場合かも知れない。

「移り」は、「写・移」の自動詞形であつて、「顕現」と同根であると言う。ものの形や内容が、そっくりそのまま、他のところに現われることなのだ。

文化の伝承とは、それが、上手く「移り得た」結果、次の世代にそっくりそのまま出現する、と言うことにならうか。こう見てくると、個体の成長に関しても、或いは人類の歴史を例にとつても、「移る」という現象は、その特性を説明

する重要な鍵であると言えそうである。

今月は、「うつる」というテーマで、幾つかのエッセーを集めてみた。新学期が始まると、子どもたちの生活は、新しい場へと「移る」。例えば、新しい幼稚園に、或いは、新しい組の新しい部屋に、新しい先生や友人と出会うことで、人間関係の移行もあろう。

大きい組になつて部屋が変わつても、子どもの生活が変わらないとすれば、それは、主要なものが「移り得た」結果かも知れない。大きく変貌したとすれば、それは、「移る」の類義語「変る」の力が強かつた、と言うことであらうか。

移行したことで、何が「そのまま持ち越され」、何が「別のものに」変わるのだろうか。夏休みを間に挿むことで、子どもらの生活が、どのような「移り変り」を示すのか、興味深く思われる。

(本田 和子)

幼児の教育 第八十巻 第七号

七月号 © 定価二七〇円

昭和五十六年六月二十五日 印刷

昭和五十六年七月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売所

フレーベル館にお願いいたします

好評発売中!!

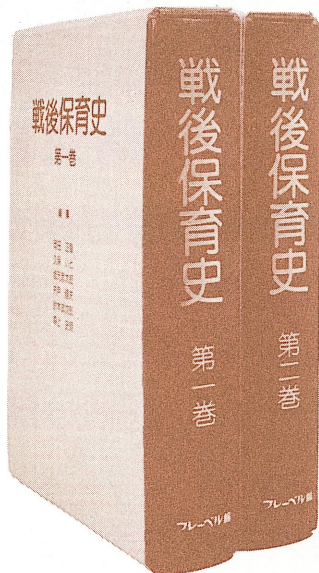
戦後保育史〈全2巻〉

編纂 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎
央戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗

日本で初めての生きた戦後保育史!

- 幼稚園・保育所・幼児文化の三面から展開されている戦後保育史は本書が初めてです。
- 法令や制度の背景、現場の受けとめ方などが浮き彫りにされていて、総合的に理解できます。
- 歴史の第一線で活躍されていた方々の証言により、当時の状況が手にとるようにわかります。
- 貴重な資料により戦後保育史の真実を伝える保育史です。全国各地の地方史も含まれています。

A5判・上製本・第1巻580頁・第2巻512頁 セット 定価9,800円



私の保育どこが問題?

本吉圓子・笠間典美 共著

“よい保育を” 見直してみよう!

今まで「よい」と考えられて来た保育は子どもたちを馬鹿にし、駄目にすると言われたらどうしますか?

保育日誌を通して、その問題点を指摘し、自主的な子どもを育てる保育の具体例を語ります。

B6判・304頁・定価1,200円



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

新刊案内

大場牧夫保育対談

—— 幼児教育の本質を求めて ——

保育実践者が保育の本質と重要性をさぐる対談集
幼児をどのような人間に教育するのかという教育目標や、
幼児保育は何をどう発展させるのかという実践の場での問
題点など、保育の基本的な問題を取りあげて論ずる対談集
です。

■大場牧夫著 A5判・240頁・定価1,200円 千250円

幼児の教育相談



子どものしつけや教育について悩みをかかえている親がふえてきている。本書は日常起こりやすい保育の疑問を取りあげて、子どもの自主性を育てるという方針でそれらの質問に答えています。

■平井信義著 B6判・218頁・定価1,000円 千250円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館